

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可
昭和十二年一月廿日印刷
昭和十二年二月一日發行

第三卷 第二號

土 淨

號 月 二

全國佛教青年
會聯盟 主事

淺野研眞著 (最新刊) 菊判二二〇頁
一圓・送十錢

青年の佛教讀本

青年の爲めに、青年指導者の爲めに

颯爽として現れた善美の書！

「青年」なる言葉は流行語となつてゐる。敢て流行を追ふのではない。眞に青年のためにする佛教の宣揚は、教界緊要の活問題ではないか。批評のみ多くして實動なき教界、稀に見る實動家としての著者、今その新しき感懷を盛つて青年のために萬丈の氣を吐く。全教界に薦む。

内容

三十三課：陽春四月、花まつり、科學の彼方に宗教、教團の問題、農村寺院、眞の佛教復興、佛教と女性、新戒律運動、印度の横顔、アルビニズムと佛教、孟蘭盆會、遊行僧一遍、死の問題、求道夜話、ヴェルダンの戰跡を訪ふ、佛教の療病觀、念佛と現世利益、邪教と正教、祖師鑽仰、聖德太子十七憲法、其他

好評重版又重版の新刊書

加藤咄堂著 一圓卅錢 送十二錢

運命の解剖

吉岡禍福の原因しらべ 十版

倉田百三著 一圓五十錢 送十二錢

女人往生集

純眞な信仰物語り、
悩みある女性に讀め 忽八版

加藤咄堂著 一圓廿錢 送十錢

死後はどうなる

人生の一大事を解決す 廿四版

西行と一茶 (信仰讀本)

蓮沼 文範著 一圓五十錢 送十二錢

親鸞聖人 (信仰讀本)

倉田 百三著 一圓五十錢 送十二錢

迷信に陥るまで

中村 古映著 一圓 送十錢

文部省認定 年中行事講話

佐川臨風閣・高橋梵仙著 一圓卅錢 送十二錢

蓮月尼

蓮沼 文範著 一圓卅錢 送十錢

放送 菜根譚講話

加藤 咄堂著 一圓卅錢 送十錢

佛教とは何ぞや

加藤 咄堂著 一圓 送十錢

發行所

東京市芝公園 〇一ノ七

大東出版社

振替東京一四七番 電話芝三九四番

知恩院史
編纂主任

井川定慶著

法然上人の選擇集

待望の全釋書生る

平易完璧の講義

選擇集は皆様御承知の通り始祖法然上人の代表的著作ですが難解の爲適當な講義書がありませんでした。此度知恩院史編纂主任の井川定慶氏がラヂオ放送で非常な好評を博し出版要望の聲多數の爲更に補訂して出版されました。美しく立派な本になりました。淨土宗關係の皆様は是非一本を備へて、上人の法淨に浴してゐたゞきたい。

内容の偉装幀の美

元祖法然上人の御法語が極めて平明に説き明かされてゐることは何より結構です。これに依つて皆さんがしつかりした信仰を得て下さることを望んでやみませぬ。

淨土宗管長 岩井智海大僧正
知恩院門跡

總 枝 大谷瑩潤臺下

佛教聖典の大衆化即ち誰にでも了解し得る様に易釋されたいとは各方面から叫ばれてゐる聲である。今淨土宗の聖典であり淨土真宗の教義にも重要な地位にある選擇集を畏友井川定慶師によりて放送され一般大衆に多大の感銘を與へられたる事は誠に感謝に不堪次第である。今此れを上梓せらるゝに當り再び放送を聴聞された方も聞き漏した方も共に信仰の泉に浴する機會を與へられだる事を歡喜するものである。

體裁

四六判三五〇頁上質紙
本文新鐫九ポイント組
國寶御影その他口繪三葉
金箔押文字オフセット多
色刷法然上人繪卷表紙

定價 一圓三十錢

(内地送料一二錢)

東京市赤坂區表町三丁目

新英社

電話

(赤坂二八四〇番
赤坂二七三一番
振替東京五四五五〇)



◇浄土第三卷第二號 二月號 目次◇

- ・表紙……………石佛
- ・扉……………青柳喜兵衛
- ・目次カット……………鈴木金平

論説 皇道と三寶……………高楠順次郎……………(二)

聖人物語 多武峰の増賀聖人……………古木鐵太郎……………(七)

の四偈 誓超世の願……………大野法道……………(六)

信託講話 墓……………(はか)……………眞野正順……………(六)

處世物語 古今教歌物語……………五味三郎……………(三)

信仰相談……………中村辨康……………(五)

取越しと臨終讀經・信さへあればよいか・浄土宗と眞宗との相違點……………(五)



編輯後記……………(三)

講義典 見失はれた金剛石……………中村 辨 康 (三)

鑽 仰 運 動 ニ ュ ー ス……………(六)

説小と話童 名物槍踊り由來……………玉奥 井 德 榮 太 郎 畫 (三)

老 僧 と 雪 佛 (昌野 畫水)……………赤 木 健 (四)

俳 壇……………太 田 耳 動 子 選 (四)

歌 壇……………與 謝 野 晶 子 選 (七)

隨筆 ほ と け の く に……………上 中 甲 堂 (五)

め く ら 經……………清 水 谷 恭 順 (三)

實 話 仰 自 分 の 體 で 本 堂 の 建 立……………窪 川 旭 丈 (五)

法然上人の 信仰生活

中村辨康 著 四一六 版 定價 三十四錢

これぞ光明！ 時代の悩みを一身に背負ひ、精
魂をつからしめて、求めに求めた巨人が求道生
活の跡！

現代日本人が擧つて求めてゐるものは現實の生活に確りと根を張つた正しい信仰である。それがこゝにある。宗教を特權から解放して正しく民衆の上に齎らした巨大無双なる聖、我らが祖師法然上人の辿り給ひし信仰の道程こそ、現代人の求めてやまぬ信仰と最も良く合致するものである。

この書には、上人が萬人と共に悩み求められた求道、信仰の御生活を軸とし、それを廻る時代の種々相を描いて、何人にも納得の行くやう新切丁寧に説かれてある。

讀んで得られよ！ 正しい信仰を！

目次

第一 求道生活——第一期求道生活——求道の動機、恩讐の彼方へ、菩提寺での生活、上洛の道すがら。第二期の求道生活——叡山の出家生活、功德院の學問生活。三第三期の求道生活——讀書三昧の生活、叡空上人との接觸。四第四期の求道生活——碩學歷訪の旅。五第五期の求道生活——再び讀書生活へ。

第二 信仰生活——入信時代の新生活——強い自己反省、萬人を包む人間反省、開宗の根底。二開宗時代の生活——山を下つて京の町へ。三專修念佛の生活——信仰を萬人の胸へ、集つて来るあらゆる階級、偉大なる人格の力、大原勝林院の信仰問答、全佛教の再認識。四迫害受難の生活——三十年氣が付かなかつた恨み、具體化して來た迫害、弟子の罪を負ふて、逆縁を順縁と見る、死生を超へた信仰の力、配所から再び京へ、死後まで續けられた迫害、宗教の極致。法然上人年表

◇ 發行所 法然上人鑽仰會 ◇

淨土二月號

たゞ極樂のねがはしくもなく

念佛の申されざらんことのみぞ

往生のさほりにては有るべけれ

法然上人法語抄七八





皇道と三寶

文學博士

高楠順次郎

聖なるもの

佛教と云へば釋尊を想ひ、釋尊を語れば印度を想ふ。此の偉大な釋尊を産み出した印度の人種は、元來、ヨーロッパ人種と同じアリヤ民族である。

今から約五千年前、小亞細亞バビロン地方に活動を始めた優秀なる人種があつた。

彼等は自らアリヤ人種と稱して居つた。此のアリヤと云ふ言葉は『聖』と云ふ意味であるから、アリヤ人種と云ふのは『聖なる人種』であると云ふことになる。

この人種が或る時代になつて、その信奉する宗教の相違か、又は同種族間の闘争の結果からして、一方は西に、一方は東へと相別れ、こゝに民族の移住が行はれ、東西に別れることになつたのである。

就中、西に向つてヨーロッパ方面に赴いたものが今日の白人種の一部である。他方、東に向つたものは、その後彼等が西域地方に到達した時、又二つに分れ、一方はベルシャに入つて伊蘭民族となり、一方は印度に入つて印度民族となつたものである。

この印度に入つた民族は、天然資源の豊穡なるパンジャブ（五河）地方を永住すべき好地として選び、土民を征



服して此處に生活をおこすことになつたのである。かくて彼等は、大自然の影響と、環境に恵まれた地に生活するやうになつたため、本来明晰なる頭腦の持ち主であつたから、ものごとを深く考へるやうになり、思想的に、哲學的に一大飛躍をなし、遂に釋尊の如き世界史上に永劫の光りを放つ大聖者を産むに至つたのである。

此の聖なる人種、即ちアリヤ族から生れられた釋尊が、「王族の身をもつて、自ら人種の平等を強調された。」のだから、その教説が普く一切の人々に慈雨の如く感ぜられたのも當然であつたらう。

——『聖なるもの』とは人種の區別について言ふのではない。人種はどこまでも平等である。人種に高下があつてはならない。人種名稱が『聖』だからと云つて、その人種の一人一人が聖なる徳を具へてゐるとは云へない。聖であるとか、ないとか云ふことは、個人の人格についてであつて、人種の問題ではない。アリヤ人種だから聖であり、非アリヤ人種だから聖でないといふことはあり得ない。私が開闢せんとする道は、たゞ聖なる人格を作り上げようがために外ならない。聖なるもの、聖者、聖なる人格、これを作り上げやうとするのが自分の仕事であり、生命である。即ち、私の教ゆる道は、聖なる人格への完成である——と、釋尊はこう説かれてゐる。だから釋尊は、自分の教を慕つて集つて來た人々の團體、即ち教團のことを聖衆（僧伽）と云つて居られるのである。即ち聖ならんとするものゝ集り、聖なる人格をしたつて集り來つた者の團體と云ふ意味であつて、これが佛教々團の始まりである。これ三寶として歸敬せらるゝものゝ一つ、即ち「僧寶」である。

このやうに釋尊の教、即ち佛陀の教の目的は、聖なる人格へアリヤブトガラへの創造であるから當然その完全位に到達せる結果がなくてはならぬ。この完全位に到達せられたものが佛陀即ち、三寶中の「佛寶」である。その佛陀の顯現したまふた理想が法で、これが「法寶」である。これで佛と法と僧との三寶がそろつたことになる。



一體三寶

さて、そこで此の三寶と云ふのはどうして起つて來たものであるかと云ふことを少しく述べて見よう。

菩提樹の下で大なる悟りを開かれた釋尊は自ら精神界の轉輪聖王として君臨されてゐるのである。轉輪聖王といふのは天下を統一した皇帝のことである。これは鹿野苑といふ所で始めて説法された時のお經を『轉法輪經』とせられてゐることである。これは佛が輪寶といふ武器を轉ぜられたのではなくて、法即ち「理想の輪」を轉じたとの意味であつて御自分が未だかつて轉じたことのない法輪を轉ずるのだと言つて説き出されたものである。それが釋尊の説かれた「中道」の教であり、五人の比丘に對して始めて試みられた教説である。然もそこには、五人の比丘が入門して來てゐるのであるから僧が出來上つた譯である。これで能説の「佛」と所説の「法」と、能護の「僧」と此の三つが具はつた譯である。この佛法僧の三つが揃つた時、これに三寶と云ふ名を與へられたのである。

三寶と云ふのは、

第一は佛であるから、佛自身を指したものであり、

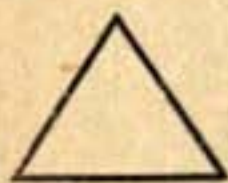
第二は法であるから、佛自身の説かれた法である。最初は唯『初轉法輪經』のみで、これに「中道」「八聖道」が説かれてある。それが教の全體であつた。

第三の僧は佛を奉じ、佛の説かれる法を護持する團體、即ち教團のことである。

かくて佛教の三寶は、三寶そのものが、佛自身であり、佛自身の理想であり、又この理想を守る團體をもこの三寶の中に入れられてゐるのである。又寶と云つても佛の教自身がその寶の一つであるから、能説の主たる佛だけの寶ではない。同様に能護の主體たる僧、即ち佛教者だけの所有する寶でもない。つまり佛も法も僧も、各、その寶の一つである。この三寶は理想を與えたもの（佛）も、與へられた理想（法）も、又その理想の教へを受け たもの（僧）も、俱に入れてある筈であるから、この三つがばらばらに離れてはいけないのである。つまり、佛を



皇道(法)



臣民(僧)

一にしてゆくとき、國家の上にも亦、佛教と同じく一體三寶の思想が表現せられてゐるのであ

天皇(佛)

法僧のそのの如く、同じく國家の三寶として互尊、互寶の事實が示されてゐるのである。

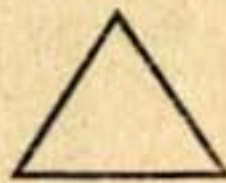
即ち、君は民の心を以て心とせられ、民は君の心を以て心とし、而も皇道を尊重して、上下

これを一體三寶と云ふ。だから、三寶は互尊主義、互尊主義である。然もこの三寶の互尊、互寶關係は國家の理想生活であつて、國家に於ても 天皇は皇道といふ法をもつて治しめし給ふのであり、その皇道を我が日本人と

佛の中には、法もあり、僧もある。
法の中にも、佛もあり、僧もある。
僧の中にも、佛もあり、法もある。

實として三つを別在してゐるものとしての話である。三寶は各一寶の中に含まれ、その一つの中に三つが内在してゐるといふ意味で三寶相關し、これを一體三寶と名づけるのである。別在の三寶としても一體三寶である。即ち、

法(理想)



僧(法人)

能護(教團)の佛教者からは所護の法であるから、相關れないのは勿論であるが、これは三

相關々係にあるのであつて、法を中心として見れば、それを説いた佛からは所説の法となり

一人だけ切り離しては何にもならぬ。佛の説かれた理想があつて始めて我々の奉すべき標的があるので、この三寶は相關々係のものである。そこで三寶とは云つてゐるが、一體、それは誰の寶かと云ふことになればそれは、佛の寶でもなければ、佛教の寶でもなく、又佛教者の寶でもなく、實に三寶はその國家が所有しなければならぬ寶である。其處で佛教者はこの三寶を如何いふ風に見てゆけばよいか。前述の如く法は理想であり、その法の理想が人格化すれば佛であり、即ち法身である。此の法の理想が民衆化して集團に現はれた、即ち團體化したものが僧で、これを法人といふことも出来る。要は法が尊いのであつて、世界に於ける唯一人者として仰ぎ奉るべき大恩教主の佛と、その佛の説かれた法と、法を護持すべき團體、この三つが相關れない



る。これが國家全體主義の表現であつて、天皇陛下の大稜威の下に在る國體の現實である。

聖德太子の御理想

この一體三寶は、聖德太子の御理想であらせられ、太子は實にこれによつて日本の國家を御統制なされたのであつた。即ち、聖德太子の『十七條憲法』には、その第二條に、

篤く三寶を敬へ。三寶とは佛法僧なり。則ち四生の終歸、萬國の極宗なり。何の世何の人か是の法を貴ばざる人尤だ惡しきもの鮮し、能く教ふるをもて從ひぬ。其れ三寶に歸りまつらずば、何を以てか枉れるを直さむ。

と宣へられてある。四生とは胎生、卵生、濕生、化生を云ふので、生きとし生けるものゝ意である。萬國の極宗なりと仰せられたのは、佛教が民族全體の社會生活に最も適してゐるとのお言葉である。即ち、聖德太子は、どの宗教がよりどころになるかを憲法の上にお示しなされたのである。

太子は、蘇我の馬子といふ逆臣が現れて、君臣の大義が亂れかけて居つた時に生まれ、この國家をはつきりと、率土の瀛も皇土にあらざるはなく、天に二君なきを示されたのである。こゝに一體三寶の思想が表現されて居り、我が國の君と理想と民とは一體でなければならぬことがよく示されてゐる。

上御一人から出る御理想は、日本の血統團體たる國民一人残らずがこれを遵守し奉るべき大法である。此の御理想が完全に履行され實現されてゆくところ、皇道の輝やかしき具現があるのである。

つまり、太子の此の一體三寶の御理想は、國家全體主義の理想と完全に一致してゐるのである。國家全體主義の原理は、實は佛教の『華嚴經』に説き明かされてゐる法界緣起説にあることを忘れてはならぬ。

以上、佛教の三寶と國家の三寶を述べたが、この精神が完全に顯現されゆくところ、始めてそこに聖なる相を見出すのであり、それが國家によつて具現されてゆくときこそ、眞に佛教の理想が行はれ、聖德太子の御理想が實現されるものであると思ふのである。

多武峰の増賀聖人の話

古木鐵太郎

むかし、多武峰に、増賀聖人といふ人がありました。俗姓は橋氏といつて、京の人であります。生れて間もなく、父母は譯があつて、阪東の方に下ることになりましたので、馬の上に興みた様な物をこしらへて、乳母に抱かせて、それに乗せて、この児をつれて行きました。ですから乳母は兒を抱いて、馬の

上に乗つて行きますと、眠くなつて居眠つてしまひましたので、兒は馬から轉がり落ちました。さうして十丁程も行つてから、乳母は目を覺してみますと、兒は見えません。落つこつたのだと初めて氣が付きましたが、何處で落ちたのやらさつぱり分りません。とんだことをしたと思つて、このことを父母に云ひま



した。父母はこれを知ると、聲を擧げて泣きながら、「あの兒はきつとそこいらを通つてゐる馬か牛か人に踏み殺されてしまつたらう。もう生きてはゐないだらう。でも、その死骸だけでも見届けたい。」

と云つて、泣きながら引返して探してゐますと、十丁程戻つたところの狭い道の中に、この兒が空を仰いで笑つて臥てゐました。見れば泥にも汚れず、水も着かず、疵もついてをりませんから、父母は大層喜んで直ぐに抱きとつて、こんな不思議なことはないと思つて、歸つて行きました。ところが、その晩こんな夢を見ました。泥の上にとても立派な床が出来てゐて、美しい色模様の蒲團が敷いてあつて、その上にこの兒が坐つてをります。そして顔附のいゝ子供の、髪を結つたのが四人ゐてこの床の四隅に立つて、

「これは佛様の授け子であるから、かうしてわれわれは守つてゐるのだ。」

と、口口に云つてをりました。そして夢がさめました。

それから、この兒は只者ではないといふことが分つて、蝶よ花よと可愛がりながら育てゝゐるうちに、何時の間にか兒は四歳になりました。ところがある時、父母に向つて、

「わたしは比叡山に登つて、法華經を習つて、佛法を學ぼうと

思ひます。」

さう云つて、外のことは何も云ひません。父母はこれを知いて驚いたり不思議がつたりして、

「小さいくせにどうしてこんなことを云ふのだらう。ひよつとするとこの兒には神様が託いてゐて、さう云はせるのではなからうか」

と思つてをりますと、この兒を抱いて乳を飲ましてゐるうちに、兒は見る間に大きくなつて、年が三十位のお坊さんになつて、手にお經を捲いてゐるのです。その傍には立派な聖人がゐて、

「お前たちは何も驚いたり不思議がつたりすることはない。この兒は深い因縁があつて、聖人にならなければならない者だ」

と父母に告げたかと思ふと、夢がさめました。それからといふものは、父母はこれはやがて聖人になる者だと思つて、喜んでゐました。さうして兒は十歳になりますと、遂に比叡山に登つて、天台座主の横川の慈慧大僧正のお弟子になつて、出家をして名を増賀と云ひました。そして法華經を習つて、六ヶ敷い法文を勉強しますと、心は廣く智りは深くて、もう立派なお弟子になりましたので、お師匠の座主も大層感心なされてをりました。が、學問の合ひ間合ひ間には、きつと毎日法華經一部と三

度の懺悔を缺かしたことはありませんでした。そのうちに、道心はますます堅くなりましたので、この世の名誉や利益を打ち捨て、たゞ後の世の菩薩のことがかりを考へてをりますと、こんな立派なお弟子といふことが評判になつて、方々から來てくれといつて呼ばれましたけれども、固く斷つて、どうしても行かうとしませんでした。そして、

「自分はこの山を出て、多武峰といふ所に行つて、そこに籠つて、靜かに修業をして、後世を祈りたい」

と思つて、お師匠の座主に暇を乞ひますと、座主もなかくそれをゆるされませんし、傍のお弟子たちも強く止めますので、甚く歎いて、心が狂つた様に振舞はれました。

その頃、山の内に僧供を引く所がありました。それでみんなは下僧を遣つて受けましたが、増賀は自分から黒く汚れた折櫃を提げて行つて、それを受けました。僧供を引く行事どもはそれを見て、

「この人は貴いお弟子なのに、自分で僧供を受けられるのは不思議なことだ」

と云つて、人に送らせようとしたが、増賀は自分が受けると云つてきませんでした。ですから行事等は、

「何か考があるのだらうから、云はれる通りにしよう」

と云つて、その様にしました。増賀は受けられますと、部屋には持つて行かないで、賤しい者等と一緒に道に竝んで、木の枝を折つて箸にして、自分も食べ、みんなにも食はせますと、人々はそれを見て、

「この人はどうも當り前ぢやない。氣が狂つてゐるのにちがひない」

と云つて、狂人扱ひにしました。こんな風に何時も振舞ひましたから、仲間のお弟子たちもつきあはないで、お師匠の座主にもこのことを申し上げました。そこで座主も、こんなになつたものを、今は何とも支方はないと云はれたのを聞いて、増賀は思ひ通りになつたと思つて、山を出て多武峯に行つて、そこに籠つて、靜かに法華經を讀んで、念佛を唱へてをりました。上には魔障が強いからと云つて、麓の里に居所を造つて、廻りに垣を築いて、そこに住んでをりました。また一生懸命になつて二十一日の間、三度の懺悔を行いますと、ある時、南岳、天台の二人の大師が出て來て「なかく感心なことだ」と云つて賞められた夢を見ました。それからといふものはますますそれを怠りませんでした。そのうちに、貴い聖人であるといふことが世の中の評判になつて、冷泉院といふ方がお招きになつて、御侍僧にしようとなさいますと、お招きに随つて參つても、いろ

いろと狂氣染たことばかり云つて、逃げて來ました。こんな風に何事につけて狂氣沙汰ばかりしでかしましたけれども、一方ではますます立派な悟りをひらかれました。もう年は八十幾つにもなつて、病氣など少しもせず、たゞ思ひ惱んでばかりをりましたが、十幾日前から自分の死ぬ時が分つて、弟子たちを集めて、そのことを告げました。「わしは長年願つてゐたことがやつと叶ひさうだ。もう近いうちにこの世をすて、極樂に行けるのだが、こんなうれしいことはない」さう云つて、弟たちを集めて講演をして、互に議論をし合つて、研究をしました。それから往生極樂といふことに寄せて和歌をつくらせたりしました。そして聖人は自らこんな和歌をつくりました。



瑞齒さす八十あまりの老の浪

海月の骨に逢ふぞうれしき。

また龍門寺といふお寺にゐる春久聖人といふ人は、この増賀聖人の甥に當つてゐて、昔から大層睦しい間柄でしたから、この聖人が來て傍に附いてゐますと、聖人は大層喜んで、いろ／＼なことを話されるのでした。そのうちに、早や聖人が死なれる日となりますと龍門の聖人や外のお弟子たちに向つて、「わしが死ぬのは今日だ。ところで、碁盤を持つて來い」と云ひましたから、隣りの部屋から碁盤を出して來ました。佛様をお据ゑになるのだらうと思つてゐますと。

「わしの體を起してくれ」

といふことですから、云はれる通りに起しました。すると碁盤に向ひながら、龍門の聖人を呼んで、

「碁を一ばん打たう」

と、如何にも力なげに云ひますから、念佛を唱へられるのだと思つてゐたのに、これは氣が狂つてをられるのだらうと、情なく思ひましたが、この上なく貴い聖人の云はれることだからと思つて、云はれる通りに傍へ寄つて、碁の上に石を十ばかり互に置きますと、「もういゝゝゝ、打つまい」

と云つて、押し壞しました。そこで龍門の聖人は、

「一體どうして碁なんかお打ちになるのですか」

と恐るゝきゝますと、

「ずつと以前、わしは小法師の頃、人が碁を打つのを見たが、只今、口に念佛を唱へながら、ふとそれが思ひ出されて、碁を打つてみたいものだと思つたものだから、打つたのだ」

と答へました。少時するとまた、起してくれと云ひますので起しますと、「泥障を一懸求めて持つて來い」

と云ひました。すぐに求めて持つて來ますと、

「それを結んで、わしの頸に懸けてくれ」

と云ひますから、その通りに聖人の頸に懸けました。すると

聖人はひどく苦しきさうなのを我慢して、左右の脇をさし延べて「古泥障を引つ懸けて踊るのだ」

と云つて、二三度ばかり踊つて、「これを外してくれ」

と云ひましたから、外してやりました。そこでまた龍門の聖人は、

「一體どうして踊なんかなさるのですか」

と、恐るゝきゝますと、

「わしが若い時に、隣りの部屋に小法師等が集つて面白さうに騒いでゐたのを覗いてみたら、一人の小法師が泥障を頸に懸けて、胡蝶、胡蝶と人は云ふけれど、古泥障を引懸けて踊るのだ」

と、歌ひながら踊つてゐたのが何とも云へず好かつたが、長年忘れてゐたのに、いまふと思ひ出されたので、それを自分もやつてみたいと思つて、踊つたのだ。もう思ひ残すことはない」

と云つて、皆を去らして、室の中に這入つて、藥の床に臥て法華經を誦しながら、手には金剛合掌の印を結んで、西向きになりながら死んでしまひました。その後、多武峰の山に埋めま

した。ですから實際、最後に思ひ出したことは、やつてみるものです。このことを知つて、聖人も碁を打つたり、泥障を懸けたりしたのです。上品上生に生れたといふのは、この聖人の様な人のことを云ふのでせう、と語り傳へたそうです。

東北南部地方とうほくなんぶちほうにのこる

めくら

經きやう

大正大學教授

清水谷恭順

般若はんにや腹はら箕田み神鏡しんきやう。

鑊かん柱じ采坊さいぼう札さつ行持ぎやうぢ般若はんにや。

腹はら箕田み柱た笙しやうけん碁ご尾をん

貝かひ食く堂だう一賽いつさい九矢くやく九く舍利しやり

四し鋤しき麩ふ猪あ食く食く食く麩ふ

猪あ鋤しき束そく錢ぜ食く食く食く束そく

錢ぜ鋤しき重ちゆう僧そう行ぎやう鋤しき矢や九く

麩ふににようぜ錢ぜ舍利しやり四し錢ぜ笙しやう

頰はう食く僧そう麩ふ笙しやう麩ふ

文字もんじを解かいせぬ人々ひとらのためために作つくられた經文きやうもん

て、短みじかいいが意い味みの籠こもつた般若はんにや心經しんきやうを選えらん

だのは興きやう味みがあります。

摩訶まか般若はんにや波羅蜜はらみつ多た心經しんきやう

觀自在くわんじざい菩薩ぼさつ。行深般若ぎやうじんはんにや

波羅蜜はらみつ多た時じ。照見せうけん五蘊うん

皆かい空くう。度一切どさいくやく苦厄くやく。舍利しやり

子し。色しき不ふ異い空くう。空くう不ふ

異い色しき。色しき即そく是ぜ空くう。空くう即そく

是ぜ色しき。受想じゆそう行ぎやう識しき亦やく

復ふ如に是ぜ。舍利子しやりし。是ぜ諸しよ

法はふ空相くうさう。不ふ生しやう不ふ



眼乳。麤九。麤錠。麤象。麤
 劍。錢子。食ふ。重(箱)六。鋤。
 六重(箱)僧行。鋤。六。劍。
 荷び。錢乳。心猪。六。鋤。
 笙子。箕。東。頰。六。劍。貝。
 苗。四。六。猪。鋤。貝。六。六。
 眼尾。矢。九。六。六。眼尾。陣。
 苗。四。六。爐。四。矢。九。六。
 爐。四。陣。六。九。四。卵。眼乳。
 堂。六。乳。矢。九。六。砥。九。猪。
 六。笙。砥。九。子。坊。臺。
 さッ(小便の出る音)田繪般若腹箕田庚。申。
 六。蹴(る)。蹴(る)。六。蹴(る)。蹴(る)。

滅。不垢不淨。不增不
 減。是故空中無色。
 無受想行識。無限
 耳鼻舌身意。無色
 聲香味觸法。無眼界
 乃至無意識界。無無
 明。亦無無明盡。
 乃至無老死。亦無
 老死盡。無苦集滅
 道。無智亦無得。以
 無所得故。菩提
 薩埵依般若波羅蜜多故。心
 無罣礙。無罣礙



子。六卯。九。麩。尾。ん。厘。
一。賽。天。堂。六。僧。九。行。
涅。槃。算。錢。笙。佛。繪。般。若。
腹。箕。田。子。砥。九。あ。ア。野。
九。俵。算。脈。算。坊。臺。
子。乳。般。若。腹。箕。田。錢。臺。
陣。重。箱。錢。臺。眼。尾。重。箱。錢。六。
錠。重。箱。錢。六。塔。塔。重。箱。
能。錠。一。賽。九。心。爺。麩。
子。子。背。乳。般。若。腹。箕。
田。重。箱。束。背。乳。重。箱。輪。乳。
猿。手。猿。手。腹。猿。手。
腹。僧。猿。手。坊。主。僧。
輪。蚊。般。若。神。鏡。

故。無。有。恐。怖。遠。離。
一。切。顛。倒。夢。想。究。竟。
涅。槃。三。世。諸。佛。依。般。若。
波。羅。蜜。多。故。得。阿。耨。
多。羅。三。藐。三。菩。提。
故。知。般。若。波。羅。蜜。多。是。大。
神。呪。是。大。明。呪。是。無。
上。呪。是。無。等。々。呪。
能。除。一。切。苦。真。實。不。
虛。故。說。般。若。波。羅。蜜。
多。呪。即。說。呪。曰。
揭。諦。揭。諦。波。羅。揭。諦。
波。羅。僧。揭。諦。菩。提。薩。
婆。訶。般。若。心。經。

【解説】

『心經』とは『般若心經』といふお經の名を略した言葉で、委しく云へば『摩訶般若波羅密多心經』である。

それにこのお經は極めて短く、全體の文字が僅に二百七十二字しかない短篇でありながら、しかもよく佛教の原理を包含して餘すところがない上に、讀む口調から云つても實にすらくとしてゐるので、文字の讀めないやうな人にでも口から耳へ傳へるだけで、たやすく覺えることが出来るやうな關係から、非常に廣く讀まれてゐるのである。今は、そのお經の意味についてお話ししてゐる餘裕はないから、すぐ『めくら心經』についての解説にうつることゝしやう。

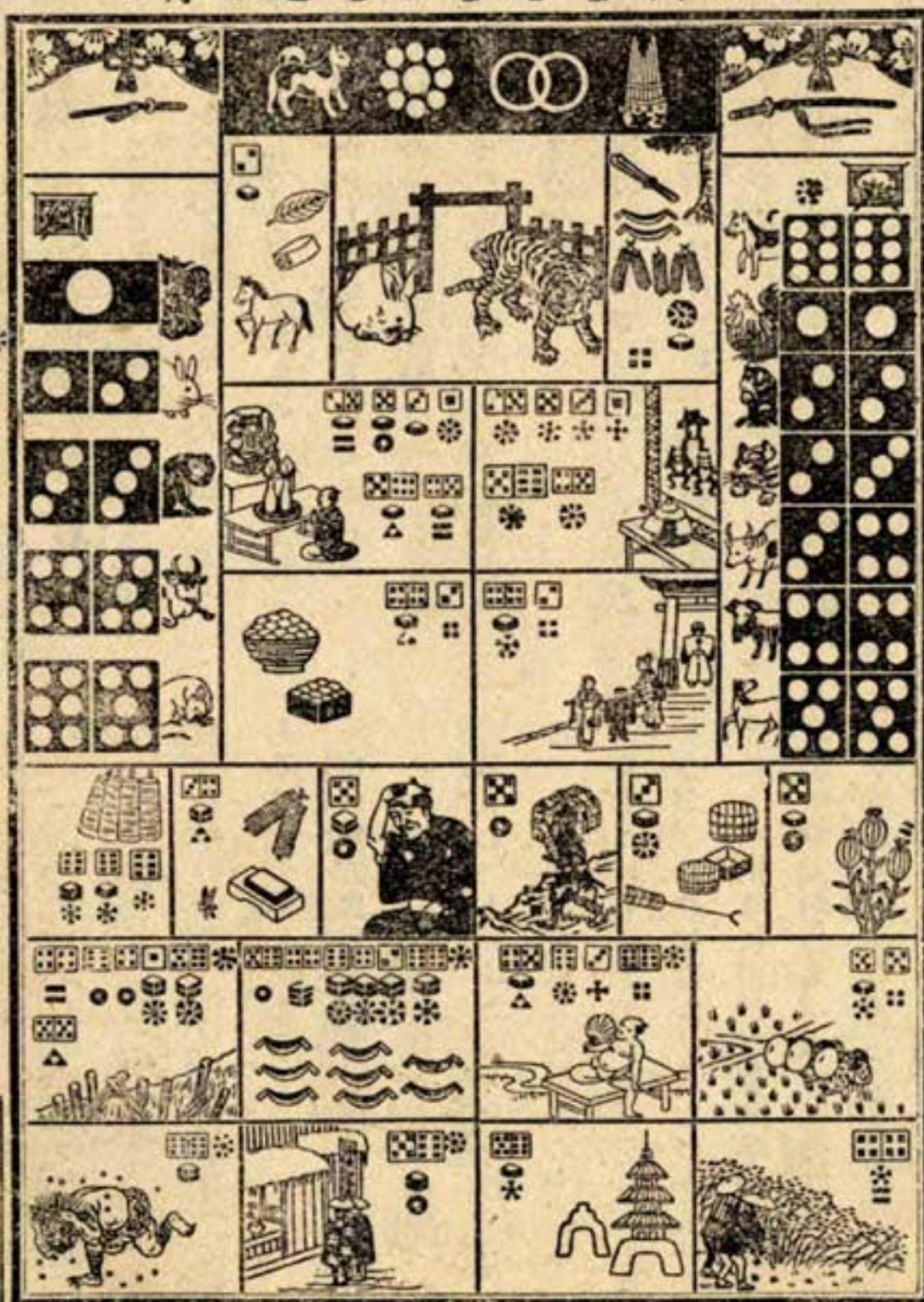
『めくら心經』

『めくら心經』といふのは實物でご覽のやうに、まるで判じ繪のやうなもので、なかなか面白いものである。これは昔の僧侶が

日月のともゑじんを板ん志

文字を知らない人のために、特に繪でそのお經が讀めるやうにつくつたものであるから、これさへ見れば所謂「あきめくら」でも、此の『般若心經』を讀むことが出来たので、そんなところから此の判じ繪みたいなお經を『座頭心經』とか『めくら心經』

とかいつてゐるのである。既にご承知のやうに、文字が一般に普及されて誰にでも讀めるやうになつたのは、極近頃のことであり、昔は文字の讀めない人の方が多かつたのであるから、かうした繪によつていろ／＼なことを傳へて居つた



ミヨゴラクメるけ於に方地北東

ものらしい。この『めくら經』の行はれてゐた南部地方では、今でも『座頭曆』といふものがあつて、繪で出來た曆が年々刊行され、老人達の間には非常に重寶がられてゐるといふことなどを考へ合はせて見ても、かうした『めくら心經』とか『座頭曆』とかいふその昔は相當ひろく普及されて、どんな邊鄙な地方にでも、又一字半句讀めないやうな文盲の人の間にでも、随分と重寶がられたものであらうことは想像に難くないのである。

讀　　み　　方

聞くところによると此の『めくら經』にも二三種類あつて、それぞれ少しづつ變つた繪をもつたものがあるらしい。

『めくら經』の讀み方は、その地方獨特の方言が交つてゐるから、ちよつと判讀に困るものもある。

どうしてもはつきりと合點のゆかぬものは、五行目の第一字にある「し」と、八行目の第二字になつてゐる「にやう」である。

就中、「にやう」については最近その地方の人から教つたことであるが、稻の扱を扱き落した藁を田圃などに堆く積みあげてあるものゝことをその地方の方言で「にやう」といふのださうである。又「四」について、昔花札のやうなものに、かぶ札といふものを使用して勝負したことがあつて、その札の印が四であつたから、これを「し」とよませたのであらうといふ説もあるが、恐らくさうであらう。

蹴合を「聖碍」にあてはめてゐるが、これは蹴る蹴るで「けけ」か、鶏の蹴合の時の鳴き聲かのどちらかであらう。

かういふ風に讀んでくると、この判じ繪みたいなものが『お經』であり、昔の人がお經を讀まうとしてどの位苦心したかゞ察せられるわけである。

座　　頭　　曆

序ながら好事家の参考にもと思つて『座頭曆』の寫眞を掲げておくことにした。圖の中央は 昭(笙) 和(輪) 九(九曜星) 戌

(犬)であり、その左右に大刀、小刀を置いて、月を大小に分け、その下に衝立を畫いて「朔」とよませ、大の方では昭和八年の十二月一日が「戌の日」、小の方では昭和九年の一月一日が「いの日」に當つてゐることを示してゐる。

中央第二段目は「紀元二千五百九十四年」といふこと、「歳德神は、い、の、間、あきの方萬よし」といふこと、「初午は二月十日」といふことを表はしてゐるのである。

かやうにして讀めば段々分つてくるであらうが、これはなか／＼むづかしい。但し今こゝに掲げたのは昭和九年の曆で、太陽曆になつてからも、未だに舊曆をつかつてゐる地方で用ゆる曆であるから、昭和九年の曆でありながら、月日を示すには舊曆を使つてゐるため、この點を注意して讀まねばならぬ。これについて今少し説明すればよいのであるが、紙面の都合上この位にしておいてあとは讀者のおたのしみにして置いて、皆様に判讀していただくことにしやう。(をはり)

短歌

興謝野晶子選

一等 京都 松尾 慈海

何故と問ふこと勿れ落葉をば焚く
ごと日記を積みて今焼く(評) 深く静平なる作者の心境に對して
送らんとするものは其れ合意。

二等 大阪 小山 文二

おのれ生くいみじく照らすみ佛の
光の道を踏みしめながら(評) 信ある人の道、まことに然からん
と稱し。

三等 新宮 奥村 映水

鰯の魚大漁と云ふ貝の音のひびき
も渡る浦の初春(評) 南紀の海のほとり春の初めを叙
して微笑ましむ。

山梨 伊藤 久次

家を守る神のみ前に杵の音明るく
ひびく歳の暮かな

長野 中山 弘

雪に映え黒く流るゝ天龍の川舟な
かく水脈ひきて行く

三重 大野 歩行

朝の鑑しづかに上をわたる時知ら
ず思はず手を合すかな

山口 長岡 白朝

立枯れしダリアの下に堆く盛り
上りつつ白菊の咲く

滋賀 本間 秀道

うたかたの身のさびしきもみ佛を
ここに持てばわが力わく

静岡 一向 山人

あたらしき年の初めをみ佛に天下
和順と祈りつるかな

兵庫 西島 春人

地蔵ますみ前の小菊うち萎れ木枯
わたる野の暮れの道

長野 下平 武志

豊年のきざしとおぼえ門松に雪ふ
り積る小山田の里

広島 柴田 福三

限りある生命なれども天地のごと
とこしへに生きんとぞ思ふ

北海道 寺田 禎山

森の松田川の柳のきの梅みな眞白
なり雪の山里

千葉 高橋美矢子

とり入れもすめば楽しく正月の買
物せんと町に出で行く

長野 光智房元海

おん經を誦せよしたかふもののご
と房の窓打ち霰降るなり

滋賀 静永美根子

冬の雨さと過ぎつれば落葉飛びみ
堂の屋根の雀子の啼く

福島 齋藤 華舟

吾妹子の髪の香りにふれずして幾
日経ぬらん遠き旅行く

名古屋 二宮 静治

翻め終へ歸る夜道の寂しきに落葉
ひそかに舞ひもこそ散れ

静岡 丹野貞治郎

さ夜更けて明き月影さしも入りわ
が家の庭の雪はれにけり

北海 花田 順往

心して道をもとめよともすればあ

らぬ方にも誘はれん人

鹿兒島 藤崎 耕我

老ひぬれば過ぎたる跡は忘れても
日々新たなる道をたどらん

新潟 榎本 伸子

貧しくも母と子とみて僅かなる物
分けて食らふ吹雪する宵

徳島 神原 梅

わが惱みいと深ければ常闇の世に
住むごとく光もとむる

香川 横江 史枝

くちなしのいろあざやけし置く霜
の白きがもとにまろく光りぬ

広島 上原 良人

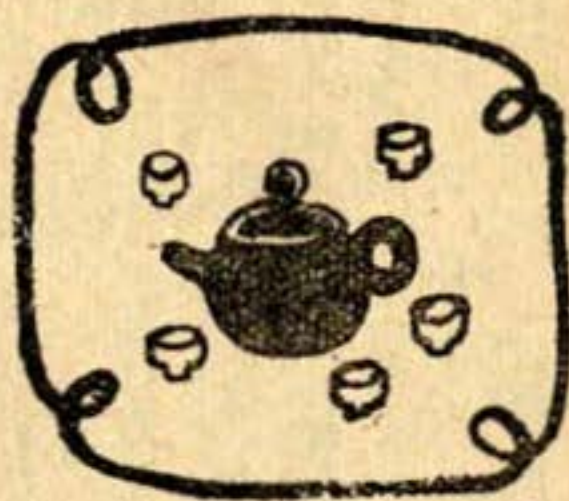
冬の夜をとすわが灯にしたひよ
る蜉蝣一つ身を焼かれけり

香川 角田 貞子

宿かせし兵を送りて立つ門に仰げ
る秋の清き星影

歌壇・俳壇投稿規定

官制はがきにて一人三首以内、各係
宛御送り下さい。今後一、二、三、等
富選の分には本會發行の書籍を御送
りします。



超世の願

—『四誓偈』講義— 「その二」

大野 法 道

(一) われ超世の願を建つ

必ず無上道に至らん

この願満足せずんば

誓つて正覺を成ぜじ

四、願は欲の最後のもの

之は四誓の中の第一誓で、發起した願を必ず成就する誓約である。

まづ「超世の願」について述べねばならぬが、しばらく「超世」を後廻しにして、こゝで「願」なるものが何であるかを詳説しやう。

人は生れながらに欲をもつてゐるが、この欲が千態萬様の形

をとつて大變な働きをする。

廣く云へば人生はすべて欲で動いてゐるのだ。文化の進展にしても、國運の伸張にしても、すべて人間が「斯くありたい」と意欲する心から現發するのであるから、欲は實に有力なものであるに違ひない。

しかし欲の間ちがひと云ふことがある。大官の地位に滞れて法の處刑を受けねばならぬ惡事を働くやうなことで、他人に話もできないやうな欺瞞で以て利を貪るやうなこと、わが身の程も知らずに無鐵砲な欲を起して、結局、行きづまつてしまふやうなことなど、そうした貪婪な邪欲は今の問題ではない。

希望といひ、理想といひ、立志といひ、計畫といふ。これらは皆欲の顯はれならざるはないが、それ／＼に欲の心の働き方

が多少異つてゐる。簡単に云つてみれば、目的物を想定して、それを實現するためのプランが計畫であり、所至の境地を見定めたのが立志であり、それに向つて勇ましく前進するのが希望であり、希望の一層擴大された最後のものが理想であると云へやう。

これらは何れも、人生に生氣を興へるものであつて、引籠み思案ばかりしてゐる生ける屍にも似た姿を撃退し、躍進また躍進、どこまでも伸びゆく道を開くものゝ如くである。

かやうに見れば、人間の正しい欲は志を立て、計畫をもち希望に燃え、理想を抱くので盡きるやうであるが、實はまだその外に、「願」なるものが最後に控えてゐる。

五、願に救はれる不安焦燥

大乘佛教で云ふ願は、立志、計畫、希望、理想といふ言葉では願はしえない意味をもつてゐる。

願も欲の一種である已上、目指す物を持つてゐるのであるがしかしその物は、今の我が身の在る所から遠い彼方に、かすかに存在するのではなく、わが身が、はやその物の中に住んでゐるといふ、鞏固な自信を以て進動するのが願である。

世間の希望や理想のもつ欲は、目指す物が我身から遊離して

ゐる。故にその歩み方は、眼が先きの方へばかりついてゐる。従つて自然に駆け足になりがちであり、つまづいたり轉んだりする。また捕らぬ狸の皮算用で、夢ばかり見てゐるから、歩みが錯亂して落付かない。

今の世の人の宿痾である不安と焦燥は、こうした欲の持ち方から來てゐる。

この病弊を救つて、人生に生え抜きの、欲を淨化するものが願である。

願は充足の信に生きる意欲であるから、向ふばかりを見て追つかけてゆくのではなく、今を確實に擲んで、充たされてゐる喜びに前進する。充たされてゐるといふのは、何もせずに袖手徒食してゐることではない。それでは中身は空疎である。本當に充足されてゐるか否かは、其人が願をもつてゐるか居ないかで定まる。

願に生きてむくくと前進する生活者こそ、正しく充足されてゐるのである。

窮乏の感や、不平不満の心からも、前進ができるやうに見えなくても、それは先きから先きへと追つて行くく、まはりの輪廻であり、歩みにゆとりがなく、潤ひと粘りを缺くから枯木のやうに、一寸した風にも折れ飛ぶのであり、少し永い雨

に遇ふと腐つてしまふ。枯木に前進はない。

躍進日本の歩道にしても同じことである。

無條約時代だからと云つて、何の充足の信もなく、たゞ徒らに列國の建艦の鼻息ばかりを伺つて、それに對應してゐるだけであるなら、それは機械武力に於て彼等に譲らぬまでであつて依然として不安と焦燥とが附き纏ふてゐる。根本に於て、光輝ある無比の國體に體得さるゝ充足の信があり。それから發足した防備に於てこそ、眞に抜くべからざる無敵の強みがあるのである。たゞ躍進々々と、足もうつろに走つてゐるのでは、廻り燈籠がまわつてゐるのと同じことで、斷じて國の進みゆくべき道ではない。

六、超世の願

大乘佛教の生活者である佛、菩薩のもつ願が、はや、世に超えたものであることは、前に述べた願の意味で明らかであらう。

ところが阿彌陀佛の願は、「別意の弘願」と云はれるやうに、一般の佛、菩薩のそれを、更に超えた別途のものである。

【註】 別意の弘願——善導大師の觀經玄義分に出る。

願が充足の信に立つものであることは既に述べたが、救はる

べき衆生が佛名を唱へる所に、完全なる教化の充足を信じられたのが阿彌陀佛である。

いづれの佛、菩薩も願の所有者であるからには、教化に關する或る種の充足の信を持たるゝのは當然である。こゝにいふ充足の信とは、つまり、之で行けるといふ衆生の歩道を見出すことで、それを見出さうとする佛、菩薩の苦心は並大抵のもではない。その結果、それ〴〵の信が立てられるのであるが、多くは、衆生の生活に顯はさるべき眞實相の列舉、即ち「六度」の如きが説かれ、また末梢神經を動かすやうな輕爽な、或は奇警な振舞に宗教の感觸ありと見られてゐる。

【註】 六度——布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧。または六波羅蜜ともいふ。

今、阿彌陀佛は、時代と社會と場合によつて變る心構へよりも、それらを貫く、あらゆる生活の基本となるものを、見出すことをモットーとして、遂に稱名の一行に充足の信を立てられたのである。

この佛の願には、總てに於て四十八願あるけれども、第十八の念佛往生の願が、その中心であり、主體であつて、衆生が佛の願に眼を開いて唱へる稱佛の聲は、何でもないやうであるがしかし、そこから導かれる生活の逞しさは、何物にも喻へられ

ぬものであることを、知見する所に打ち立てられた願である。

【註】第十八願——「もし我れ佛を得たらんに十方の衆生至心に信樂して我が國に生れんと欲して乃至十念せんに、もし生れずんば正覺を取らじ。」

「必ず無上道に至らん」と云ふのは、念佛で行けるといふ自信である。

「必至」といふ言葉は、我々のもつ言葉の中で、確實といふ意味を顯はす極度のものであるが、こゝに、前に述べた願の、目指す物の中に住する前進のこゝろが出てゐる。一つの理想を描いてどうしてもそこへ行き着くことを希念し、それを追ふてゆくのでは、これを人間に就て云へば、果して思つた通りになるか、ならぬかは、その時にならねば判らぬ事であり、途中でコンディションの不備から、出直しか、方向轉換かを餘儀なくされる事などもあつて、最初に描いたまゝのものが出来上るとは限らないのである。故に「必至」といふ言葉は、教化の充足の信を實踐しゆく所に無上道ありといふ宣言であり、見出されたる第十八願の中に生きて居らるゝ佛の聲として聞くべきである。それであるから、念佛の聲に佛ありといふ意味で、「名體不離」と云はれるのである。

【註】「名體不離」——南無阿彌陀佛の六字の名に佛體が即し

てゐること。

「この願満足せずんば、誓つて正覺を成ぜじ」も、已上述べた心と同じである。これを、若し願が成就しなかつたら正覺を成ぜぬ、佛にはならぬと、正覺を賭けた言葉と見るのはなまぬるい。更に一層強く、念佛の救ひが成り立つ所に佛があるといふ決意を告ぐる言葉と見るべきである。なぜなら、教化充足の信に立つて起された第十八願は、この佛の生命であるから、此信の實踐の外に佛を見ることはできないからである。

法然上人御影

(國寶)

右京權大夫隆信筆
堅一尺四寸、横八寸

京都知恩院所藏
絹本寫眞プロセス版

- ◆ この御影は長くも 後白河法皇さまの勅旨によつて時の畫聖 藤原隆信朝臣がその精魂をかたむけて作りあげたものです。
- ◆ 原本は知恩院にありまして、現に國寶として大切に保存されてゐます。實に相好端嚴、筆致の極をつくしてゐます。
- ◆ 本會は種々苦心の結果、精巧なる十數度刷の工程を経て、漸くその複製に成巧し廣く有縁の方々にお願ちして居ります。
- ◆ 一本を座右に掲げて、念佛の元祖、法然上人さまの御苦勞のほどを偲びたてまつり、その人格を景仰して常に尊き御風華を慕ひまつることは、念佛に生かされてゐる私たちの最も大なる念願でなければなりません。

【頒布價一葉金壹圓】

(送料不要)

申込所

東京市芝公園明照會館内
法然上人鑽仰會

振替東京八貳壹八七番



りなめたふ使に代一の身恥と理義と情と慈悲は銀金

世の中はなかのよきこそ菩薩なれ

人をも助け、我も安樂

室鳩巢翁は「さて相はるの道を云はゞ、

常によろこび、弔を述べ、疾み病を問ふは

定まりたることと云ひながら、もつとも禮

儀を盡し、眞實の志を致すべし。水火盜

難不慮の難あらば互に合力して随分救ひ助

くべし云々」と云はれた。世の中に交情よ

く交はるには何人と雖も斯る心掛が必要、

佛心になつて我人ともに助け合ふたならば

古今教歌物語

五味 三郎

是程安樂な途はないであらう。

此の世にて慈悲も惡事もせぬ人は

さぞやゑんまも困り果てなん

之は無爲無能にして世の中にあつて毒に

も藥にもならぬ人を戒めた歌である。娑婆

に居て善い事もせねば惡い事もせぬ人は、

閻魔の應でも地獄か極樂か何方にやつたも

のか判斷がつかぬ。さりとして惡事をせよと

いふのではない。どし／＼と善い事にのみ

心掛く可きである。

濁り江に人をも身をも沈めじと

助け合ふこそ清き世渡

二宮尊徳翁は「天に善惡なし、人あつて

善惡生ず、人道は天理に順ふものなれども、

その中に區別をなし、稗莠を惡とし米麥を

善とす。皆人身に便る事を善とし、不便な

るを惡とす」と説かれた。吾々は不便なる

惡を世の中から刈り盡し、眞に天理に適ふ

善なる道を此の世に推し擴めねばならぬ。

之が即ちにごり江に人をも身をも沈めぬ清

き世渡りである。

我が庵は青天井に地のむしろ

月日をあかり風を手ばうき

「二簞の食、一瓢の飲」と云ふが、廣々と

した天地を住居として、太陽や月を燈と

も見、塵吹き拂ふ風を簾とも見る。至極氣

樂な生活といふ意であるが詰らぬ外見を見張り豪奢を衒ふ爲に俗人の目を驚かすやうな建物を造つても天地に比すれば殆んど論ずるに足らぬ。即ち狭苦しい考へを持たずに心を廣く大きく、所謂天空海潮の心を述べたものである。

飯と汁木綿著物は身を助く

その餘は我を責むるのみなり

徳川家康ある時、近習に向つて、「汝等身を持つに肝要な話がある。五字にて云ふものあり、七字にて云ふものもあるが、何方を聞きたいか。」と云はれた。近習の者は、「何方も聞き度うござる」と答へた時、「五字にて云へばうへを見る、七字にて云へばみのほどをしれである。汝等之を常に忘れてはならぬ」と云はれたが成程誠に道理ある言葉である。所謂「五字七字の教」またよき處世訓ではある。

やぶれたる着物をきても足ることを

知ればつゞれの錦なりけり



この世にて慈悲も惡事もせぬ人はさぞやえんまも困り果てなん

假令身には破れたる襦袢を着ても心に足ることを知つてその分に安んじ、何の蟬まりもなく暮して行かれ、ばそれ程尊いことではない。かゝる人の心の中は立派に着飾つた錦だ。古今の高僧知識の例に見ても自ら明らかにするではないか。

慈し惜しや憎や可愛と思はねば

今は世界がまるて我が物

紛々擾々浮世の渦巻の中に悶掻き苦しむ

心の中に少しの餘裕もないのが當今の人の常であるが、かゝる人も一朝悟りを開いて來ると天地の物はすべて公平無私、決して己一人の私すべきものでない事が分つて來る。即ち廣々とした愛憎の念がなくなつて來る。所謂淨土の世界となり世の中が面白くなつて來るのである。

角といふものは心の角をいふ

殊に女はこゝろまろかれ

「女の妬みなきは百の拙きを掩ふ」といふが「愷氣女には角が生える」の譬へ徒らにそここゝに突き當る角などを生やして騒ぎ廻るよりも何事も下手に出るやう心掛けたらば人から物笑ひの種を蒔いたりするやうな事もなからう。

撫でさすり大事にするも手焙りの

つめたうならぬうちてこそあれ

寒い／＼冬の日、一つの手焙を傍において客と對してゐると茶を飲む時にも一撫で所在なさに一撫で、戸外を眺める時も一撫

で火のある内はするともなしに撫で廻はして大事にするが、若し火の氣の絶えた時、手焙りを傍に置いて撫で廻してゐる人は恐らくあるまい。親への孝行も之と同じで「孝は百行の基」と云ひ、「木静かならんと

欲すれど風歇まず、子養はんと欲すれど親在さず」丈夫の中に孝行はして置くべきである。「孝行をしたい時分に親はなし」か。

忘るなよ天地の
恵み君と親

我と妻子を

一日なりと

も

吾々が此の世に生れ来て安全にその日その日が送れるのは果して誰のお蔭であらうか。幼くしては父母の愛をうけ、長じて



角と云ふものは心の角をいふ殊に女はこころまろかれ

は師の教を受け、更に又天地自然の恵みと、君主の宏大なる恩をうける。即ち此の四恩の爲に、自ら破壊的な行動は起さぬことである。常平生之を大にしては天地、君と親の恩、小にしては妻子、他人の恩を思ふ

てこそ、吾々の生活は、彌陀の世界にあることが出来るのである。

外よりは来る盗人に
限りあり

限りの知れぬ内の
盗人

王陽明は「山中の賊は破り易く、心中の賊は破り難し」と云つた

るにはやはり聖賢の書を讀んで、只管、徳を養ひ克己心を涵養することである。荒れ馬を制するには太い綱が要る。その丈夫な綱が即ち「克己心」だ。南無阿彌陀佛の境

地こそ此の克己心の極致なのである。

いつとなく見知り聞き知る蚤の息

天に通ふといふたとへあり

隠し事は知れ易い。昔、支那の楊震といふ學者が、ある時王密と云ふ者から賄賂を贈られた時に、王密を呼んで「此の贈物を貰つた事は誰も知る者はないと思ふであらうが、さうでない。天も知り地も知り、その上にお前も知つてゐれば私も知つてゐる。他人には、隠し終せやうが、此の四つの者にはどうしても知れぬとは云はれまい」とて其の贈物を返したとの事である。況して此の歌の通り小さな蚤の息も天に通じるとか「壁に耳あり量に目あり」人の口には戸が建てられぬ「秘密々々が口から口へ、何時か戻つて来る秘密」口止めたことが、いつか我が耳へ戻つて来る。「彼奴、あんな奴でないと思つたに到頭喋つたな。事信用の置けない奴だ。」と悔んでも後の祭りである。

寒熱の地獄に通ふ茶びしやくは

心無ければ熱がりもせず

佛語に「心頭滅却すれば火も亦涼し」とあるのは此の歌の意で、恰も茶柄杓が水の中から煮え沸る湯の中に入れても無心なればこそ別に寒い熱いのと騒がない道理である。

人は氣の持ちやうといふもの。

金銀は慈悲と情と義理と恥

身の一代に使ふためなり

世俗に「三カク術の應用」といふが、此の「三カク術」といふのが即ち「義理かく恥かく」「人情かく」だ。世の中には随分此の「三カク術」を應用して金を溜め、公益に關した事には一切、鏗一文でも出し遣る者が、己の口や眼を楽しませる爲には、一擲千金の豪遊を極め込む馬鹿がある。心すべきことである。

みがいると稻はうつぶく人は身が

重くなる程のし上るなり

「稔る程頭を下げる稻穂かな」黄金の鎖が垂れ下つたやうに稔れば稔る程頭を下げる稻穂の床しい有様には一種の尊敬の念さへ起つて来る。乃木大將が時々田舎の百姓爺と間違へられて、素氣ない待遇をされても、唯莞爾として笑うて計り居られたといふ話を聞くとそよろに奥床しさを感ずるではないか。

我がよきに人の
悪しきがあるも
のか

人の悪しき
は我が悪し
きなり

とかく自分の悪い事は棚へ上げたがるものである。「戒むれば譴なし」自ら我が身を固く戒めて身を慎めば他人から彼是と誹を受くる事はない。悪く云はれるのはその人

の平常に何か缺點があるからである。

善惡を映して見せる淨玻璃の

鏡はおのが心なりけり

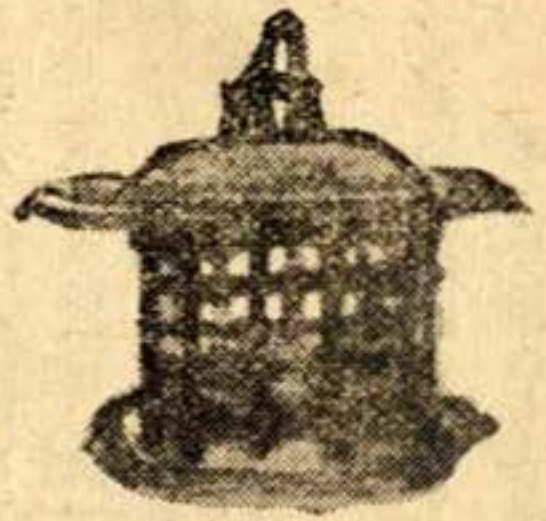
「鏡は女子の魂」と云つて女の道具の中で鏡ほど大事なものは無い。鏡は畢竟、至



いつとなく見知り聞知る風の息天に通ふと云ふたとへあり

のである。曾子は、「日に三度我が身を省る」と云はれたが、鏡に向ふ毎にその心持で正しい顔がうつるか、邪な心が現はれるか、自ら反省すべきだ。

誠を象つたもので、徒らに顔や容姿のみを寫すのが目的ではなく、實は心の善惡を寫し見て、邪の心を去り心の曇を磨く爲である。人間心の心の中の物思ひは如何に隠さうと努めても隠せるものではなく、喜怒哀樂愛憎、すべて顔色に現はれるも



墓 (はか)

眞野正順

この頃、ひきつゞく學課の豫習に疲れてゐる女兒にすこし
澄い空氣を吸はせるために、私達は二人で、短い旅を冬の伊
豆にしたことである。

船原ホテルから路をへだて、向ひ側のゆるい傾斜地には、
あたゝかく陽がさし、道に沿ふてこむもりと遠くまでつゞい
た茶の樹の列には、一めんに白い花をつけて、あふなどが集
つてしきりに鳴く。立ち留つてその花叢をちぎつてゐる女兒
の靴のそばには、そここゝ、龍膽の紫の花が、黄枯れた草
のあいだに、ほゝえんでゐた。

何やら、話しながら歩いてゐるうち、私達は何時の間にか、
とある農家の庭に入つて來てしまつた。

通り抜けの許しを乞ふべく聲をかけて見たが、靱のやうな
ものを縁側に乾して白く陽のあたつてゐる家の奥からは、何

の應えもない。おそらく、家の人達はみんな畑に出て働いて
ゐるのであらう。たゞ、彼方の納屋の前に一匹の黒い小馬が
つながれ、庭一杯にみなぎつた冬日の中に、しきりに尾を振
りながら、こちらを見てゐるだけである。

だまつて、庭を横切つて道の方に出やうとすると、ふと、
家のかけの葉蘭など生えた古びた車井戸の彼方に、そくばく
の緑樹にかこまれた一畝の土地があり、その中に五つ六つの
石のならんでゐるのが眼に映つた。よく見ると墓である。高
さは一二尺位しかない小さな碑石ではあるが、いづれも白く
苔をふいて、美しく掃き清められた黒い土の上に、靜かに影
を含んで並んでゐる。――

ふと、何がなし私の胸をとらへたものがあつた。私は、ぢ
つと其處を眺めたまゝ、しばらくそこに立ちつくしてゐた。

――こゝの人達の住居は、いつも「墓」と共にある。この

人達は、その自分等を生み出してきた祖先と共に、いつも一緒に生活してゐるのである。

二

都會に住み慣れた人達が、足を一たび農村に入れたとき、まづ眼につくことの一つは、農村には到るところ「墓」が多く、しかもそれが露出して存しておる事であらう。墓地はたゞに寺院の蔭のさゝやかな生垣を透して見られるものであるばかりではなく、思ひもかけぬ畑の真中や、松並木の間の凹地や、さらには家と家との狭い間の土地にも、いたるところその苔に古びた石の姿を露してゐる。農村では墓は人々の生活に極めて密接し、人々はそれと隣り合ひ、入り交り合ひしながら一緒に生活してゐる。

この事は都會に育つた人達には、むしろ奇異の感じを與へるだらう。なぜならば、近代都市は、墓をおし隠してゐる生活であるからである。

近代都市には墓はない。——ないと云つても全くこれ無くしてしまふ事は素よりできないことであるが。——その區別は、或は高い塀で周圍から遮斷され、或は遠く郊外に搬び出されてしまひ、その日常の生活からは、なるたけ目に觸れないやうに隔離され隠蔽されてゐる。そうして、時稀、これ

に接する機会といふものは極めて少い。盆とか暮とか、その定められた時季にあつてさへ、これに訪れるものは、ほんの家族の一部であり、葬儀とか法要とか、これが主體となる時であつてさへ、現に生きてゐる交友の人々への應接待遇に忙がはしく心を奪はれて、最後、これの前に来つても、ほんの瞬時叩頭して、またすぐこれに背を向けて立去つてゆく。

近代の都市生活は、むしろ「墓」から切離された生活である。

それといふのも、かゝる近代都市を形づくり、産み出してゐる近代的な生活といふものが、甚しく「死」をきらふ生活であるからである。

近代都市を産み出したところの近代的な生活は、いふ迄もなく、歐米の彼方からこの國に移されて來たものであるが、その特長はこの眼前に生きてゐる私共のこの生命をはてしなく豊富に充實させてゆくといふ事にある。こゝに生きてゐる智力を極めて鋭敏にかつ活潑に働かす事に依つて、自然的な物を縦横に驅使し利用し、その欲望を飽くも知らず充溢させ満足させてゆく。たゞに今あるところの欲望を満足させるばかりではない。更に人為的な技巧によつて、より新たな刺激を作り、それに依つて興奮せしめられたる欲望の満足のため

に、更に智力を絞つてゆく。欲望の上に欲望を重ねつゝ、こゝにきらびやかに繰ひろげられてくる人間生命の享樂に、果てしなく追及してゆく。——それが近代的生活の特長である。

それ故、かゝる生活から云へば「死」の影は極端に忌まれる。なぜならば、それは華やかなる生の享樂を、たちまち冷たく暗く裏切つてしまふからである。「生の明るさ、その甘い華やかさは、たゞ死の影が忍び寄つてくれば、人生はたちまち暗く味氣ない淵に墮ち、更に努力するちからさへ喪はれてしまふ。それゆゑ、近代生活は、ひたすらたゞ「生」のみを取つて「死」をできるだけ、蔽ひ隠し忘れてゐやうとする。「死」の影を想はすやうなものは、なるたけ日常の生活の眼に觸れないやうに隠し、また手早く、それを眼前から抹消して終はふとする。墓地などが、しきりにその生活から隠蔽されるのはその故である。

誰しも死を好むものはない。しかしながら「生」あるところ、かならず「死」のあることは、蔽へども遂に蔽ひ難き人間の必然の事實である。「死」は生きるかぎり遂に離すことの出来ぬ我々の相關物である。この事は、人間をその全體として眺めれば、どうにもならぬ事實であるが、近代生活は、そ

の全體の一部を遮二無二蔽ひ隠して、たゞその一部分だけによつて生きやうとしてゐるのである。このやうな斷片的な生活の仕方から——たとひ如何にそれが華やかに見えたにしても——果して眞實の生活が生れ出てくるであらうか。考へねばならぬ事が、こゝにあると思ふ。

都會の生活は、人間の全體のなかから、その「生」だけを切り離して生きてゐる斷片的な生活である。それはたゞこの眼前の「生命」だけを充實させやうとするのであるから、手段はともあれそれを兎に角この眼前に遂げ得たものは成功であり、人生の勝利者であるが、遂げ得ざるものは、理由はともあれ、慙々、劣敗者として社會の下層へと押し落される。人間はたゞ目前のその効果によつて量られる。人間の價値も、たとへばかの物品のごとくである。たゞ目前の効果を求むる人間が數かぎりなく集つて押しあいへし合ひしてゐる。それが近代の都會生活である。だから、人は他を顧みてゐられない。その内面の志操をたづねてゐられない。たゞ目前の効果を目にかけて互に競ひ合ふばかりである。それ故、都會人はかならず冷たき個人主義とならねばならぬ。とにかくこの自己を、この自己だけをこの目前の利便において打立てゝ行かねばならぬからである。

このやうな生活の仕方の中に居れば、自己を産み出して來てくれた永い家族の歴史や、或は現にこの身を支えてゐてくれる知己縁類のちからなぞ——總じて社會そのものゝ縁起のちからは、正しく見極めてゐることは出來ない。たゞ目前の激しい生存競争に、それが何等か利用することのできる範圍でだけしか是れを顧慮してゐない。いはゞ切り離されたる獨りの自己を持つてゐるだけである。それ故、こゝには、親子の間にも、夫婦家庭の間にも眞の連絡の帶はない。たゞ、その自然的なる情愛と相互利益との外には、動かざる必然の絆は缺けてゐるのである。

近代生活が總じて、人間と人間との間のかたい情意的な連絡を破壊しつゝある事は、かく生活しつゝある者の中でも、常に嘆かれてゐる事であるが、顧みきたれば、その原因は、すでに人生をたゞその「生」の一部に於てのみ見る不完全な斷片的な生活態度が、それをさせてゐたのである。斷片的に人生を握る者は、また斷片的に、孤獨な個人主義に陥つて行くより外はない。

三

農村は——これに反して——むしろ「墓」と共にある生活である。都市の人達の眼には佗しく映るであらうが、常に墓

を通じて、その父祖を見つめ、また死の影を見つめつゝ生きてゐる生活である。

今でも、眼のなかに浮んでくる。

私の列車が、東北沿岸を走つてゐた時、窓から見へる、そこゝ、日本海に面して砂丘が大きな波のごとく起伏してゐる間に、黒く黠々と佗しい村々の屋根が點綴してゐた。そうして、それにすぐ隣接して塔婆なぞが亂立した蕭條たる墓地がのび、やゝ廣い道路が、それらの光景を貫いて白く走つてゐた。人々の姿は黒く小さく胡麻粒のごとく、そこを行き來してゐる。おそらく、物を搬んで町に出るにも、また隣村に行くにも、此處の人達は朝夕、つねにその墓を眺めつゝ生きてゐるのであらう。

農村の人達は「生」と共に「死」を見てゐる。死と共に生を見ることは、やがて自己をその儚りなき全體の姿において見ることである。生と死によつて區切られた自分の姿をその全體において見ることは、やがて、この悠大な天地と、果てしも知らぬ遠い時間との間に、生きかつ死んでゆく自分の短かい小さな姿を偽らずそのまゝ見ることである。すなはち、自己の限界を知ることである。

自己をその限界に於て、ありのまゝに見るこゝろは、やが

て、かうした自分を産み出してきてくれた遠い祖先や、或は、今の自分を何くれとなく支えてくれてゐる様々の縁類のちからの存在を、謙虚にうなづくこゝろとなるであらう。

農村の人達の心は、たゞ自分だけが、この目前の一刹那に充實して生きさへすれば、あとはどうでも好いといふやうな氣持には傾かない。そんな切り離された斷片的な自分ではなくて、もつと大きく天地の中に擲がつたものゝ中に、——廣く遠くつゞいてゐる家族の歴史の中に、其の一環として今の自分が現に生きてゐるとするこゝろである。

かうして、いま鐵を振つてゐる畑の土にしても、この自分が、今にして初めて此處に作物がつくれるやうに作り出したものではない。

この柔かになつた土は、遠くわが父、わが祖父達が怠らずこゝに鐵を入れつゞけて來た故に出來たもの、さては、果てもなく遠いわが父祖たちが、山を崩し、岩を碎いたその勞力の汗の結晶が、いま此處に柔かく肥えた黒土となつて傳へられて來てゐるのだ。

自分のいま鐵を入れてゐるのは、たゞの土ではない。そうではなくて、遠く祖先から積重ねられた勞苦の汗を耕してゐるのだ。自分の一生は、これに働くことに依て支えられ、それ

がまた、自分を越えて我が子孫へと果てしなく遠く續けられてゆく。自分の一生はかゝる積重ねられた歴史の連續のなかの一つの環であるに過ぎない。

それ故にこそ、農村の人達は、限りない愛着をその土の上に感ずる。それを失ふことは、我身が我が持物を失ふことではない。我身そのものを作り支えてゐる大きな自分達の歴史を自ら失ふことになるのである。

それ故、農村の人達は、目前のこの自分だけよければ、他はどうでもよいといふ個人主義にはならない。そんな斷片的に引き振つた不完全な刹那主義でなく、自分の全體を、それを支えてゐる諸々の力と共に考へるところの眞實の全體主義となり、短き一生を悠遠なる家系の連續の上に於て眺める搖ぎなき歴史主義となるのである。

——よく農村に生ひ立つ人々の特長たる、その生活の「堅實さ」の原因を尋ねて、それは「大自然の中に」生きる故であらうと説く者があるが、その淺さは、むしろ、憐むべきものである。農村人士の動ぎなき堅實さは、たゞに大自然に接して生きてゐるばかりの爲ではない。

そうでなくて、寧ろその生活の底に深く藏められてゐる、この眞摯なる生活態度より來る。すなはち「墓」に浮ぶ死の

史的來由と、共に現在常にこれを培養し維持してゐる特別な機關が、この社會の中に在るとせねばならぬ。それならば、かゝる機關は何處にあるのであるか。

かく問はるゝ時、人はやはり漠然と「教育がそれを維持してゐる」とでも答へる外はないであらう。然しこの答へも亦た甚だしく不正確である。なるほど、我國教育が特にその重心を家族尊重にも置いてゐる事は事實である。然し更に遠く眼を翻して、これを諸外國の教育に見よ。世界の何れの國、何れの民族にして、親子の相重んずべく、兄弟の相愛すべきことに、力を込めて教育してゐない處があるであらうか。これは人倫の大道であるからである。少くとも、教育の上からは家族の重んずべき事を教ゆるに、外國も我國も大差はない。それならば、何れも大差なき教育を興へつゝ、然も我國のみは特に家族觀念の深厚なのは、何の故であらうか。私共は、あの上調子な學校教育の如きものから去つて、もつと深い眞の原因を、この社會の中に探り求めて行かねばならぬ。その原因機關は必ずこの社會の中にある。かく深厚なる家族觀念の存すかぎり、必ずこの社會の中に存してゐなければならぬ筈である。

この事を探り出すためには、人は、かの外面的に薄つべら

な教育や思想にばかり頼まつてゐるだけでは駄目である。もつと實質的に民族生活の中に根基を尋ねて行かねばならぬ。

その爲には、先づかく考へて見るのが便宜であらう。現實上、わが社會に於て、如何なるものが否應なしに強制的に家族家庭を保持し、また崩壞に瀕したる家族を再構成するのであるか。その力は何處に存するか、といふ事である。不和なる親子兄弟は何の力を憚つて兎にも角にもその家庭を維持し續けてゐるか、またすでに分裂し若しくは廢滅したる家族は、何によつて復興するのを常とするか。

それは、即ち一つの連環をなしてその家族を其外部より包んでゐるところの「親族群」である。親子兄弟が不和となり互に背離して一家族が正に崩壞せんとする時、それを調停し、批判し、抑制するものは其親族である。また不幸なる孤兒寡婦を保護してその家の再興にまで導いて行くところのものは其親族の責任である。まことに、この「親族」といふ一群によつてこそ家族は常にその外部より保持され或は補綴されてゐるのである。そうしてかゝる群の存在することは、實に我國社會の一の重要な特色なのである。

泰西の家庭を外より包むものは、親族でなく知己朋友である。知友はたゞ個人を中心として集るものであるから、家庭

が結ばれても、夫妻その何れか一方を目當として集つてくる。それ故、家庭一度破綻すれば、知己の群はまたその何れか一方に依つて分れてゆく。その中に家庭を再結合する強靱なる力は存してゐない。

これに反して、日本の家庭をつゝみ支えるところの親族は夫婦個人でなくて、その結合された家族を目當としてこゝに結ばれてゐる。それ故、家庭の結合は破れても、その親族の結合は破れない。ふたゝび破れたるを補綴し、絶えたるものすら復興して行かうとする。まことに親族群こそ我國家家族制度の眞空強靱なる根基母胎である。

五

然らば、このやうな重要親族群は復た何に依て、この社會の中に維持培養せられてゐるのであらうか。諄いやうであるが、徹底を期するためには、更にこの事を問ひつめてゆかねばならぬ。なぜならば、親族群とても、また移りゆく社會の存在である限り、それを維持培養するものが無かつたならば、時と共に復た解消してゆくかも知れぬからである。

我々の生活の中で、親族關係が意識の上に浮び、その結合が新たに力強く緊め直される機會は、やはり人生の三大事たる生誕・結婚・死亡の三つの場合のやうである。この時には、

そこに集つてくる親族は其家族のあらゆる他の交友關係の上にのり出て、その重要な首位を占める。かゝる儀式では、親族は何時でも、その首坐に座る。そうして、この事によつて、親族達はお互がこの家族の親族であることの意識を強め、その結合を更に強固にするのである。

ところが、この三つの機會の中、はじめの二つ「生誕」と「結婚」の場合には、必ずしも、その親族は全部集まつて來る譯ではない。經濟的や境遇上の事情により、たとへばあまり貧困であれば、この時全親族を招く事が出來ず、また、何かの事で仲違ひでもしてゐる親族はこんな事では寄つてこない。謂はゞ、この二つの場合は完全な親族結合の機會となることが出來ない。

然るに、最後の「死亡」に到つては、かゝる總ゆる障礙は押しのけられて、全親族は必ず、その家に集つてくる。「死んだ者」に對しては、平素の疎隔も、地位の懸隔も悉く一先づ打捨てられねばならぬからである。

考へて見るに、既往、どれだけ多く「死」を通じて、斷當が宥され、私婚が認められ、怨恨が解消された事か。その實例は、各人は恐らく知り過ぎるほど、多く知つてゐるであらう。まことに「死」の儀禮に於てこそ、我國の家族・親族・

影を通じて、人間の偽らざる眞實の運命を知り、「父祖」を思ふことに依て、自己ならぬものに支えられてゐる現在自己の活命の所以を味ふからである。すなはち、隠すことのない眞實全體の姿において自己をつかむ、その事から、かの堅實なる生活態度は自からに滲み出て來たのである。

四

近時「日本自らに還れ」の呼聲高く、わが國に固有なるこの社會の特長を反省することが多くなつたのは喜ぶべき事であるが、さまざまの論議の中に、かの重厚なる「家族制度」こそ、わが國社會の無比なる特色をなすものであるとする事に就ては、何人も異論のない處であらう。まことに、我民族は、下は我々個々の生活を規定する道徳法律、慣習等の一切から、上は、至尊が全民族の大宗家と崇め奉らるべき所以に至るまで、一として、その礎をこの家族制度に基けざるものはない。我國家は、その全體をあげて一大家族である。それ故にこそ一億の同胞、上下微塵の隙間もなく緊密なる同一體となつて、こゝに無比なる國體を顯現してゐる。

それならば、我民族にとつては極めて重要なる、この家族制度の觀念は、何によつて常に我國民の中に培養せられてゐるのであらうか。

この様に問ふことは、現在、この家族制度の中に生きそれに全く成り切つてゐる一般の人達には、むしろ奇異に響くかも知れない。そうして事もなげに、「それが我民族の特長ではないか」と答へるかも知れない。

然し、かゝる答は、また本當の應答ではない。なぜならば、家族制度は我國民族の中に古くから深く滲み渡つた顯著なる特長であるとしても、廣い人類歴史を顧みて見ると、その民族が其始めもしくは或時期にもつた一般的觀念や傾向は決して何時までも其民族と共に存してゐるものではない。幾千年の間に、必ず常に變化するものが出來てくる。家族觀念は古來より我民族の血に浸透したものであるに相違ないとしても、現に、近く、明治以來泰西の思想が、我國に流入せらるゝと共に、次第に、この制度を窮屈なる束縛として、それから脱出しやうとする傾向を、我國民自らのの中に産み出したではないか。社會を支配する觀念はたゞ其儘では存続しない。必ずそれを培養し維持してゆくものが、其社會の中に存して居なければならぬ。たゞ我民族に家族的傾向濃しと云つてゐるだけでは、それは殆んど答へざるに等しいか、然らずんば、血液の神秘的盲信者である。

家族觀念が我民族に深厚なるには、必ず斯くなり來りし歴

の結帯は新たに緊め直され綴り直されて行くのである。

—そうして、かゝる、儀禮を行ふところの重要な場所は、即ちその墓の存する「寺院」である。

こゝに集つて來るところの者は、靈棺を前にして、親族は儀裝を正して其首位にならび、衆僧の誦する讀經の音律を、心を更に寂莫に誘ふ薫煙の香との間に、一同沈黙して、ひたすら、喪はれたる自分等の一環のことを想はしめられる。さうして、やがて時刻れば、親族は一人々々香を献げるために棺前に歩み出る。

この時、歩み出た一人々々は、やがて、其處に集つてゐる親族群の默然たる注視を背に浴びつゝ、その間に、それが自分等親族の一員たることが再承認されるのである。從來、如何に多くかゝる葬祭の機會を通じて、親族の新陳の素顔を見、また成人したる息子の姿を新しく見直してゐる事か。この行事が親族の親密を再び結び直すに、如何ほど實質的に深い効果をもつてゐたか、實に計り知るべからざるものがある。

それのみではない。葬儀の日は終つても、知らるゝ如く、猶夫れのみには止まらない。中陰七七日の行事がそれに續き、更に三年七歳と歳を續んで營まるゝ年回法要が連續してつゞき、その度毎に、全親族は寺院に集合して、その結合をいよ

いよ新たに、益々強靱に緊め直されてゆく。

然も「死」の起るのは、たゞ一の家族のみではない。全親族それ〴〵の家に於て繰返し營まるゝこの儀禮は、集合の機會を益々數繁く、いよ〴〵複雑に交錯せしめて、訪ひつ訪はれつ、ほとんど無盡に入交つて現はれ、それを機會に、全親族は、いよ〴〵其結帯を新たにし強靱にして行くのである。

このやうに見來るならば、日常事もなくげに營まるゝこの宗教行事が、實は、わが民族結合に重要な役割を演ずる「親族群」の維持培養のための、極めて大切な機關であり、隨つてまた、現に無比なる我國體社會の礎であり家族觀念を涵養維持してゆく眞の根元の一であつた事が氣づかされる。この事は、嘗て識者も顧みず、教育者も知らず、爲政者もまた全く閑却せる事であるが、わが民族の堅き結合の所以を深く遠く尋ね來るならば必ず、こゝに迄達して來ねばならぬ。

路傍の草に苔の蒸してゐる墓石の姿。

その形は佗しいものであるけれども、深く思ひ來れば、この國民族の光輝ある生活の礎は、奇しくもまた、汝に依て興えられてゐたのである。

信 仰 相 談

(擔)(當) 中 村 辨 康

本欄への投稿はハガキ
または封書にて、住所
氏名御名記の上信仰相
談係あてに送ること、
紙上匿名は可。

取越しと臨終の

讀經

(問) 一、當地方にては如何なる譯か新亡の佛の追善に三月掛りは良くないとか云つて、三十五日または四七日位に満中陰の法要を營む者があります。斯る事は經典或は他の書にでも根據があるのでせうか。

二、又前繰りの追善の事も同様に御尋ねします。

三、危篤にて死に瀕せる病人の枕元にて、理趣分を讀むと安樂に往生が出来ると云つて致しますが我淨土教徒として如何に處置したらよいでせうか。強いてその乞を容るべきでせうか、右の三問御面倒乍ら御

教示願ひます。

(山梨 依田淨信)

(答) 私の居る静岡地方でも四十九日の忌明けが三月越しになるのはいけないと云つて、よく取越して三十五日などにして仕もふ習慣があります。何う云ふ理由でいけないのかよく存じません。然し七七日までとはたとへ内々でも七日七日にお供物をしたり香花燈明を上げたりして、特にお祀りをするのですから、あらたまつて親戚知己を招いてお振舞をするのを色々の都合で五七日などにしたとて別段差支へはあるまいと存じます。例へば満中陰の日が、節季の大忙の日に當るとか、お正月の三ヶ日にからんだとか云ふ場

合には、どうしても繰上げねばなりませんでせう。こんな意味から考へて見ますと、我國の風習でお節句と云ふものが、正月、雛祭、端午、中元、重陽と恰度一月置き謂ゆる三月越しにありますが、それにからむと困ると云ふところから、誰云ふとなく自然に繰上げる習慣を作り、それが變化して三月越しはいけないと云ふやうになつたのではないかと想像されますが、何んなものでせうか。違ふかも知れませんが判つたら更に申上げます。また忌日前に取越してやる年回法要もよく便宜上から行はれて居るやうですが、やらないでは相濟まんと云つて、取越してやも追善供養をするのは、忙がしまぎれにやらないよりも、祖先に對する孝養の上からもよい譯で、是れまた差支へないでせう。然し

二三人一緒にかためて、三年も四年も先きのものまでも取越してやるのは、何んなものでせうか。云はばそれだけ先祖に對しての崇敬の念が薄いと云ふもので、自分も亦さう厄介物扱ひにされねばならぬかと思ふと、少々なさけなくなるではありませんか。要するに物質主義からかうさせるのでせうが、金をかけなくては追善供養が出来ぬと思つて居る誤謬からかも知れませんか。

第三問の事は、よく瀕死の病人があるとして「癒る病氣なら早く癒り、死ぬ病人なら樂に死ねるやうに」と云ふので、理趣分を讀んで貰ふと云ふ事が、俗間信仰として昔はあつたものですが、まださうした信仰が少しは残つて居ると見えます。理趣分と云ふのは、般若十六會中の第十會で般若經第五百七十八

信 仰 相 談

巻目のもの、密教では般若經の異譯である金剛頂瑜伽理趣般若經の略名「理趣經」と云ふの
 があり、其他にも異譯が四つあります。推尾博士の解題に依ると「即空の妙有を示し即事而眞を明すもの」と云つて居ますがそれが横に曲げられて、滅罪法敬愛法、息災法、死人加持法などに用ひられ、甚だしいのは立川流眞言の淫蕩なものにまでも使はれたらしいのです。此經の中には調伏とか無量變とか消災とか云ふ事も云つてあり、三つの神呪があつて、第一のは罪障消滅所欲成就、第二のは滅罪見佛、第三のは業障消除總持正法の呪文で、障が消えて喜樂が生ずると云ふやうな事を云つてあるものですから、本當の意味は空理を悟つて現實に精通する時諸障滅して菩提を成就すると云ふのですけれども、上

つ面の功利的に取られ易い文字を重視して、御祈禱に使つた譯です。重に眞言宗禪宗などで使用し、他の宗派では使つて居りません。淨土教は凡て念佛一點張り、世間の嬉戯に従ふにしても「一念大利無上功德」とも云はれて居るから、理趣分などよりも念佛で終始一貫した方がよいと存じます。

信さへあれば

よいか

(問) 野依氏著『絶對の慈悲に浴して』(三六四頁)に「世には南無阿彌陀佛と云ふ事を稱へた其の念佛稱名の力によつて救はれ往生が出来るやうに思つて居る人があるけれどもこれは大なる間違である。この所をよく辨へず、念佛さへ稱へればそれで極樂往生が出来る」と云ふ風に考へ謂ゆる空念佛になつてし

まふ、精神の無い念佛になつてしまふ念佛は稱へなくともいいから信の一念がなければならないのである」とあります。然るに法然上人は「聞けども信ぜざれば聞かざるが如く信ずと言へども行ぜざれば信ぜざるが如し」と云つて居られますが「行ぜざれば」との意は「稱へざれば」と云ふ意と考へます。稱へてこそ、はじめて信じたと言ひ得ると思ふのですが、それが根本から大なる間違ひであり稱へずとも信の一念さへあればよいと聞かされては、何だか、わけがわからなくなつてしまひます。私の進むべき道を教へて下さい。(大阪 丑島生)

(答) 野依さんは野依さんとしての御自身の信仰を述べて居られるのでせうから、敢へてそれに対する批評がましいことを述べるのは御遠慮して置きます。然し過日野依さんの發行して居られる「眞宗の世界」の十五周年記念號(十月號)に御依頼を受けて少しばかり書きましたが、恰度此の問題の事も述べて置きました。御承知のやうに親鸞上人だつて決して「念佛はいらぬ」とは云つて居られませんが、歎異鈔にも「親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀に助けられ」とか「念佛はまことに淨土に生るるたねにてやはんべるらん、また地獄に墮つべき業にてやはんべるらん總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまゐらせて念佛して地獄に墮ちたりとも、更に後悔すべからず候、其故は自餘の行を離れても佛になるべかりける身が、念佛して地獄に墮ちて候はばこそ」とか、「念佛申し候へども踊躍歡喜の心」とか「父母の孝養の爲とて一遍にて

信 仰 相 談

も念佛もをしたる」とか「ひとへに彌陀の御他しに預りて念佛申し候人を我弟子と申す」ととか色々云はれてありますやうに、念佛を業とか行とか種とか云つてそこに「無行單信」と云ふやうな意味はちつとも云はれてはありませぬ。唯だ異なるところは行をも信の中を含めて、私達の口から出るお稱名も、如來の御力にうながされて申すのであり私達の云ふ「南無」の聲も本願招喚の御聲として我が耳に聞えしめるものであると、信の方へ奪つて云つて居る事です。即ち念佛申した事が信心獲得したことで、教行信證にも「凡聖自力の行にあらず、故に不回向の行と名く」とか「往相の廻向を按ずるに大行あり、大信あり、大行とは即ち無礙光如來の名を稱するなり、斯行は大悲の願より出でたり」

とか云つて居ますが決して念佛唱名をそつちのけにして居るのではありませんから御安心下さい。然し法然上人のは、もつと素直に、如來の本願を信じて誠の心から念佛するだけでありまして、自分で申して居ても實は私が申して居るのではない。如來が申して居るのだとまはりくどく持つて廻らなくてもよいのです。

淨土宗と眞宗との相異點

(問) 淨土宗と淨土眞宗とは一體どこが違ふのですか。兩宗とも絶對他力の宗教ですが。即ち法然上人と親鸞上人の「お考へ」はどこが異つてゐるのですか。兎に角この區別のはつきり知らぬ人が多い様です。わかりやすく簡単に御説明下さい。(兵庫 牧野勝)

(答) 同じ源泉から二つに分れて居りますだけに、大體似て居る譯ですが、兄弟でも性格に相異がありますやうに、異りのあるのは蓋し止むを得ないでせう。法然上人と親鸞上人との相違と云ふよりも、均しく法然上人を元祖とする淨土宗と淨土眞宗との相違として考へるのが本當でせう。御承知のやうに淨土門と云ふのは哲學的な聖道門に對して信仰を中心とするものを云つて居りますから、佛教各派の中で信仰を中心とするものは、何れも淨土門的な色彩を持つて居ると云へます。其中でも兩宗は同一系統の信仰中心のもので双兒のやうに全く似て居なければならぬのですが、其「信」に伴ふ「行」の取扱ひ方が違つて居るので二つに分れたのだと云へない事もないと思ひます。即ち行と

しての念佛の氣持が信者の方から信仰の對象たる如來の方へ向かふのか、又は如來の方から信者の方へ來たものとして見るかの相違、つまりは、緣起の理に對する見方の相異です。例へば陽電子と陰電子との中和作用が起る時、普通に陽極に陰電子が飛んで行くと申しますが、其力を陽極から見れば陰電子を引き寄せたと云へるし、陰極から見れば陽極へ陰電子を放射させたとも云へますやうに事實公平に見れば因と縁とは相互的關係を持つて居るので、無因有縁でも有因無縁でもありません。即ち信心と念佛行とは二にして一、一にして二の關係を持つが、「二にして一」と見るのと「一にして二」と見るとの相違に依て、多少の取扱ひ方が違つて來る譯で、其處に眞宗と淨土宗との相違があります。

い ら ゆ り ど お り や つ ぶ い め
來 由 踊 槍 物 名

作 一 榮 奧
畫 郎 太 德 井 玉



獨眼龍の後楯

石田三成を謀主とする大阪方旗上げの知らせが陸前國岩手山の城主伊達政宗の許へ届いたのは、慶長五年秋も既に終りに近づいた頃であつた。

急を聞いて、上杉征伐の途中から、引返した政宗は、城内に群臣を集めて、夜を日に繼いでの戰評定。いふ迄もなくこの勝負一つで、天下の形勢が再びどうなるとも知れぬのであるから、上を下への城内の騒ぎも、眞實、無理のない事であつた。

今宵も、政宗を始め股肱の重臣七八人、城中奥深く、燈を高く掲げ、夜の更けるのも忘れて、評議の眞最中——

「殿、恐れながら暫く御待ち下さいませ。重兵衛、火急に申上げた議がござりまする」

と、話の切れ目を待つて、一座の中から、進み寄つたのは、龍臣茂庭重兵衛であつた。

「何、火急の、ふむ、聞かう」

正座に控へた政宗の、隼のやうな獨眼が、短檠の光にキラリと光る。

「はつ、餘儀でもござりませぬが、いつぞや御耳に入れました稗貫彈正、氣賀四郎の兩人、兼ねての手筈調ひ、近々事を舉ぐる由にて、今宵、手前の許まで参つてござりまする」

「ふう」

政宗は豫期した事のやうに軽く頷いただけであつた。

「兩人の申すには、鳥谷崎城攻略の上は、當家への隨身、神明に誓つて違背仕らぬ程に、何卒、殿の御助勢を仰ぎ度く、その旨拙者より殿へ取成し呉れいとの事で……」

重兵衛は語り終ると、様子如何にと、主君の顔をちつと見上げた。

一座の視線もお自ら政宗の面に注がれた。

政宗は一文字に口を結んだまゝ、その炯々たる視線を宙に浮かせてゐたが、やがて、徐に口を開いて、

「鳥谷崎は我等に取つても要害の場所、それに、もとく稗貫一族の持城ぢや、彼等兩人が見事、南部の手から奪ひ返して、その上で、我等に助力を乞ふ事になれば、如何様にも後立にならう。なれど、未だ事の成否も解らぬ中に手出しをして、若しも彼等が失敗した場合には世間の笑草ぢや、喃、小十郎、其方はどう思ふ」

と、政宗、片頼に薄笑ひを浮べたまゝ、傍近く控えた伊達家の智恵袋、片倉小十郎の方を眺めた。

「御意、仰の通り」

先程から默然として、主従二人の話を聞いてゐた小十郎は、政宗の薄笑ひを見ただけで、既に、その胸の中を見抜いたかのやうに、言葉寡く答へたゞけであつた。

「と、云つて、天下が再び如何様になるとも知れぬ此時勢に、あた
ら城一つが我等の持物になるかも知れぬ企てを、打捨て、置くのも
愚かな話、ぢやに依つて、重兵衛、その方此より立歸つて、兩人の
者に斯く申せ、鳥谷崎城を手に入れる迄は、政宗思ふ仔細あつて、
表向きの助力は致さぬが、内密に武具、軍用金の援助を致さう、な
れば城を手に入れて、眞實我等の手に属する事となれば、我等とは
同體、何如様にも助成致すと、余が申したと傳へるがよい」
流石は伊達郡の邊陲より出で、天下に覇を唱へる程の器量人、そ
の裁斷流るやうな意見に、一座は互に顔を見合せただけで、言葉を
挟む者もない。

盲目の荒熊

陸中國鳥谷崎の城は、昔安倍頼時の築いたものだと言ひ傳へられ
てゐる。小さい乍らも天險の要害に據る古今の名城、元龜から天正

へかけて、氣賀郡の豪族神貫一族がこれに據つてゐたが、天正十九
年豊臣秀吉に叛いて、淺野、南部の軍勢に攻滅ぼされ、當時は南部
家の持城、その一族の北尾張守が、之を守つてゐた。

城を追はれた神貫の一族、同名彈正、氣賀四郎の兩人は、密か
に、四方に離散した一族郎黨の者を狩り集めて、折さへあらば、こ
の城を取戻さうと、永年機會を覗つてゐたのであつた。折柄、鳥谷
崎の城兵は、上杉征伐に赴き、城内は殆んど無人同様との知らせを
得て、その上に上方では天下分け目の大戦が始まらうとしてゐる。
此機會を外してはと擧兵を決心して、兼ねて惡意な茂庭重兵衛の手
引で、伊達家の援助を受ける事になつたのであつた。

城主尾張守信愛は、嘗ては南部の荒熊と呼ばれ北國に鳴響いた猛
將であつたが、寄る年波に兩眼の明を失つて、今では殆んど盲同
様、先年入道して、名を松齋と改め、一子信忠の遺兒、松風、浦濱
の二人の孫娘に朝夕傳かれ、老後の幾年をたゞ風月を友として、睡
れる獅子のやうに送つてゐた。

従つて、今度の上杉景勝の亂にも、城中の精銳三百を撰り
勝つて、宗家南部の手に従はしめ、自分はず二十に足らぬ
近侍の者達と、戦塵を外に、靜かに留守居をしてゐたのであ
る。

今しも、松齋は秋の夜永の徒然に、松風、浦濱の二人を、
自分の居間に呼び寄せて、二人が奏でる琴の音に凝然と聞き





惚れてゐた。

年こそ老いてはゐるが、巨木を思はせるやうな頑丈な骨格、影み附けたやうに深い顔の皺、雪白の眉、澁染の法師頭巾、半ば盲いた眼をびたりと閉ちて、寂然と机息に凭り掛つてゐる松齋、その前に端座して、あか／＼と燈された燈火の光を浴びながら、白玉のやうな纖手をのべて琴を奏でゝゐる松風、浦瀆の楚々たる姿、それは名工が描いた一幅の繪にも見まがふばかりの幽玄、曲雅な情景であつた。

奥深いこの北國の山中では、秋の更けるのも早いと見えて、未だ十月の初めだと云ふのに、もう鳴く虫の聲もと絶え勝ちで、木の葉を拂ふ川風がもの悲しさうに庭の梢を鳴らしてゐた。

と、不意に、

『待て、誰か参つたやうぢや』

松齋は盲人特有の鋭さで、何事か聞き付けたと見えて、その隣にしか物を見る事の出来ない瞳をきつと見開いて、耳を聳てた。

琴の音が、ほのかな空音を殘して止むと、襖の外に周章しい足取りが近づいて、

『殿、一大事でござりまする』

襖越しに急込んだ人聲が聞えた。

「むゝ、頼母か、苦しうない、入れ」

「はつ、御免」

聲に應じて、入つて來たのは、松齋が股肱と頼む當城の重臣狼谷頼母、六十に近い嬰孺たる老人であつた。

「して、一大事とは何事ぢや」

「ははつ、もと當城の主、裨賁將監の一族、同名彈正、氣賀四郎の兩人、此度、伊達政宗を後立に頼み、當城の手薄を見て、今日中に、押寄せるとの知らせでござりまする」

「何に、裨賁の一族が……」

睡つてゐるやうな松齋の慈顔に、颯つと一條の殺氣が走る。

「同勢凡そ三四百既に相澤峠に勢揃ひ致して居るとの注進」

「ふむ、政宗奴、やりおつたか、よし、頼母、何はともあれ、火急に防戦の用意を致さずばなるまい、早々心利いた者を物見に出せ、それから、兼ねて目をかけて置いた賦役の百姓どもを驅り集めい、ぢやが、思ふ仔細もあれば、狼狽へて、騒いではならぬぞ、敵に當方の支度を知らさぬが肝心、よいか急げ」

松齋は流石に千軍萬馬の古武士、事の急を聞いても、さほどに驚く様子もなく、胸には既に、何かの手段が浮んでゐるらしい強い口振り。頼母が下つて行くと、二人の孫娘の方へ、その盲いた眼を向けて、

「松風、浦濱、其方達も今聞いたであらう、火急の場合ぢや、その

方達には、心利いた者を差遣すによつて、早々、これより山越へに盛岡の本城まで落ちるがよいぞ」

と、松齋の靜かに諭す言葉を聞き、二人の姉妹は同じやうに首を強く振つて

「御言葉を反すやうなれど、妾は御祖父様のお傍を離れるのは嫌でござりまする」

と、姉の松風が云へば、妹の浦濱も

「見す見す、お眼の不自由な、御祖父様を捨てゝ、何處へ參られませう」

と、口を揃えて詰め寄つた。

「聞別けのない事を申すな、敵は例へ鳥合集でも、三百に餘る軍勢、味方は小者を入れても僅か六十に足らぬ小勢ぢや、それも、その祖父の眼がもとのやうなら、高が野武士の三四百位、何の恐れ處もないが、かうなつては所詮は城を枕に討死の覺悟ぢや、哺、あたら蓄の花の其方達の命をむざ／＼亡ひ度くないと思へばこそぢや、さあ、一時も早く支度致せ」

「いゝえ、例へ御祖父様がどのやうに仰有つても、私達は御祖父様のお傍を離れませぬ。女ながらも、北尾張守の孫、命欲しさに敵に後を見せて、何しにおめ／＼生きてゐられませう」

「せめて、祖父様の杖ともなり、お目ともなつて、日頃賣えた薙刀の一手、花々しい戦がしとうござりまする」

松齋が宥めたり、透かしたりすればする程、二人は益々云ひ募る許りであつた。

「おゝ、か程に申しても、この祖父と籠城致すと申すか、いやもう云ふまい、そち達の健氣な志だけでも、おめ／＼彼等にこの城を渡すやうな事はあるまい。例へ眼が見えずとも、寸分狂ひのない祖父が槍先、如何にもその方達に見せてやらう、はつはつは………」

……」
笑ひに紛らした松齋の盲いた兩眼は、何時の間にか涙に濡れてゐた。

松風、浦瀨の二人は、健氣なやうでも、未だうら若い乙女達、松齋の言葉に、面をそ向けて、そつと袂を、その美しい面に當てゝゐるのであつた。

城内では、早くも事の急を聞いて、駆け附けた侍達の入交つた足音や、私語が、四隣を憚るやうに秘められてゐるだけに、それだけ一層、静寂な城内の空氣を、異様に鋭く慄はせながら、次第にその興奮を高めて來た。

亂闘の地獄繪

その夜の明け方近い頃であつた。月は山の端に沈んで、牙え渡つた星明りに、黒く聳えた鳥谷崎城は、死のやうな深い沈黙に閉ざれてゐた。

と、突如その大手口に、四隣の静寂を破つてどつと擧つた開聲――

夜目にも物々しい甲冑に身を固めた三百餘りの軍勢が、破竹のやうな勢で、目白押しに薙き合ひながら城門目掛けて、押寄せたのであつた。

と、見る間に、寄せ手の中から、眞先に進んだ一人の騎馬武者、城門際に、びたりと馬を止めて、大音聲――

「城内の者どもよく聞け、もと當城の主、裨將監の一族、同名彈正、槍先にかけ、當城を受取りに參つた。我と思はんものは出合へ、出合へ」

が、城内は人の子一人居るとも見えない程ひっそり閑として、物音一つ聞えない。

「えい、後れをなしたか、尾張守、それ、者ども、城門を打破れ」
聲に應じて、猛り立つた軍卒どもは、てんでに獲物を振りかざして、岩壁のやうな城門を打ち叩いた。

「面倒ぢや、火をかけよ、」

彈正は、見る目も遅緩しさうに、破鐘のやうな聲で、再び軍卒どもを叱咤した。

その時、今まで、死んだやうに静まり返つてゐた、城中の何處からともなく、不意に、とどとつ……と一時に百雷の落ちたかのやうに、釣瓶落しに打出した鐵砲――。續いて、篠つく雨のやうに無數

の矢が、ヒュウ／＼風を切つて、飛んで來た。

寄手の軍勢は、不意を喰つて、

「わつッ」

と、悲鳴を擧げながら崩れ立つた。

彈正はこの

態を見て、烈

火のやうに苛

立ち、

「えいつ、云

ひ甲斐ない、

返せ、止まれ

……」

狂氣のやう

に、味方の中

を駆け廻りな

がら下令をし

た。

折から城門

を颯つと押開

いて、わつと

喚聲を上げた



から雪崩のやうに一團の城兵が打つて出た。

騎馬武者二三騎、五十に足らぬ小勢ではあつたが、いづれも二回

に餘る長柄の槍をひつさげ、一糸亂れぬ槍襖の陣立、穂先を揃へ

て、浮足立つた裨貫勢の中へ眞一文字に突き入つた。

最初の一撃に虚を突かれ

て、立直る暇もない裨貫勢

は、この再度の奇襲に、また

も、どつと混亂におちいつた

が、敵の小勢を見てとると、

盛り返して、多勢を頼みに、

城方勢をおつとり圍んで攻め

立てた。

中にも彈正は、

「げえい、猪口才なッ」

猛牛のやうな呻き聲、鎧を

蹴つて、北勢の中へ割つて入

り、見る間に、七八人の城兵

を左右に突き伏せ、薙ぎ倒し

て荒れ狂ふ。

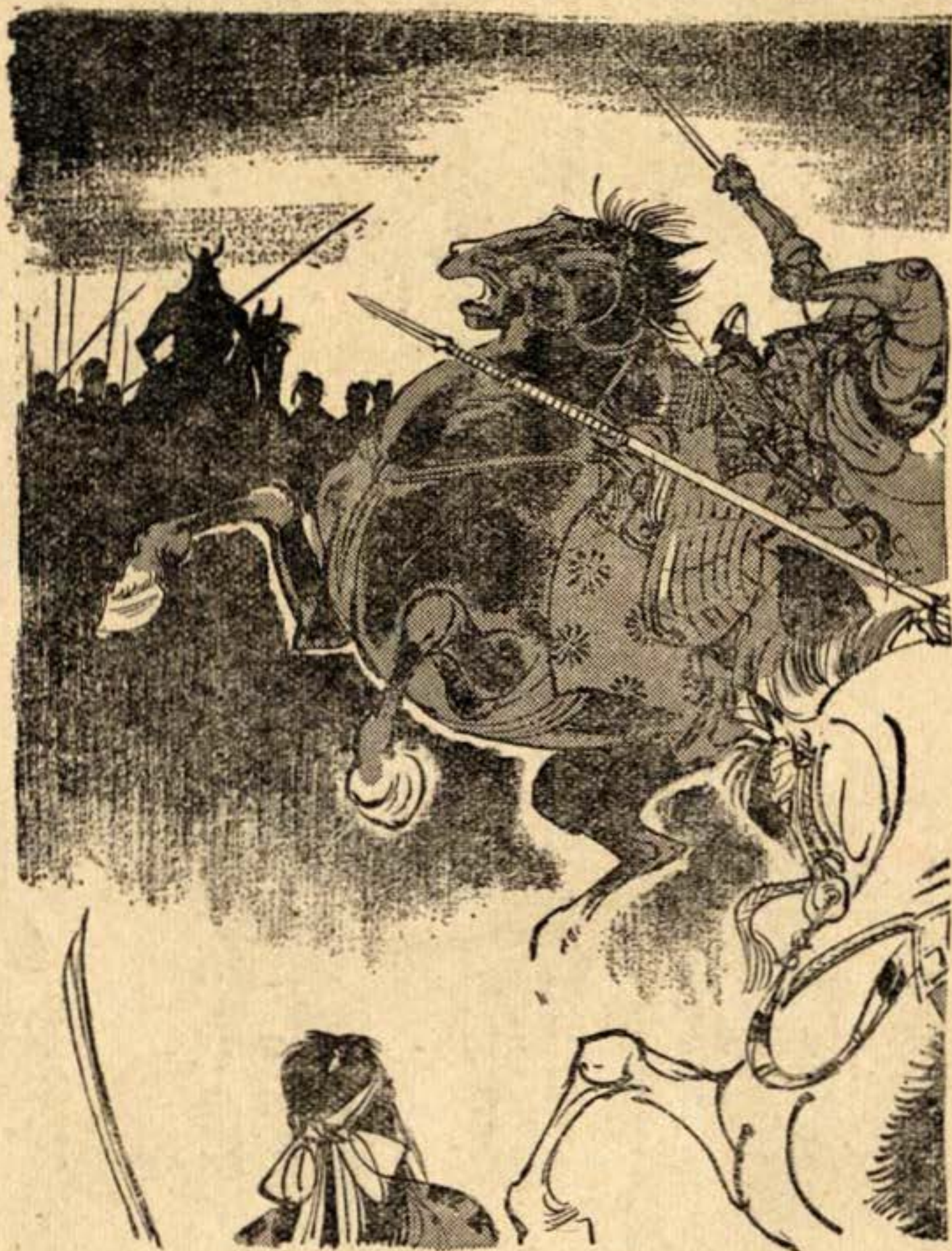
怒號、叫喚、悲鳴、矢叫

び、星明りに火花を散らして

打合ひ、揉み合ふ槍、陣太刀、そこには地獄繪のやうな血の亂闘が展開されて行く。

と、この混亂の中を、城兵達に護られながら、嵐の中に聳えてゐる巨木のやうに、雄然と控えてゐる騎馬武者があつた。

里絲織の鎧に、銀の鉄形打った冑を戴き、夜目に鮮やかな、月毛の駒にとつかとまたがり、駆け抜けて詰め寄る裨貫勢を、まるで、蠅でも拂ひのけるやうに、三間柄大身の槍先で、右左に突きのけてゐる。



「むゝ、健氣な一言、参れ」

静かなこと林のやうな松齋の一言、

「云ふにや及ぶ」

彈正は馬上高く身を浮かせて

云ふまでもなく、この騎馬武者は、鳥谷崎の城主、北尾張守松齋、左右には、健氣にも徒歩立のまゝ、小具足に身を固めた松風、浦濱の姉妹二人が、大薙刀を打振りながら、群り寄る裨貫勢を掻き別け、薙ぎ伏せてゐた。

彈正はこの様子を見ると、鞍坪に躍り上つて、颯つと一當て、駆け寄りざまの大音聲。

「おゝ、めづらしや、北尾張守、裨貫將監の一門、同名彈正、見参」

云ふ間もおそし大身の槍を振りしごいて、詰め寄つた。

『えいッ』

大喝一聲、馬首もろとも、松齋の胸板目掛けて、微塵になれと、突き込む、槍先！

が、靜かに體を捻つた松齋。

『見事ぢや』

悠容迫まらぬ松齋の言葉が、怒號の中を春風のやうに流れた。

『何をッ！』

馬足にたゝらを踏ませながら、飛びのいた彈正は、ぎり／＼と齒を喰ひしばつて、第二の構へ、

と、その瞬間——。

『參るぞ』

松齋の言葉に鐵を斷つやうな冷氣がこもつて、びたり、馬の背に身を伏せた。槍と人と、馬の背が一つになった、かと思ふ一刹那。

『えいッ！』

裂帛の氣合とともに、飛彈のやうな一撃。

『おう』

危く、かわしざまに、跳ね上りて、空を拂つた彈正の鼻の先へ、ぶうん、と、唸りを生じて、松齋の石突きが飛んで來た。

操出し、操込む、薙ぐ、拂ふ、兩人の穂先が、七八合、星明りの中で、切火のやうに閃々と煌いたかと思ふ突端、

『こわッ！』

彈正は、無慘、咽喉首を突き刺されて、悲鳴もろとも、馬上から崩れ落ちた。

大將を失つて、崩れ立つた寄せ手は、もう總敗軍、どつと一時に引潮のやうに、逃げ始めた。

『長追ひ無用、引け』

松齋は勝誇つた味方の軍兵の頭の上で、血に染まつた長槍を大きく振つた。

鳥谷崎城の搦手では、兩岸創立つたやうな深い溪谷に臨んで、その上に架せられた一條の橋を通路とした、天險の難路であつた。

稗貫勢の福將、和賀四郎は彈正としめし合はせた同じ時刻に、同勢百人許りを従へて、裏山傳ひに、槍を伏せ、足音を忍ばせながら、搦手近く押寄せた。

と、折から、大手口の方に當つて、どつと上る閑聲が木の葉を吹く風音に交つて聞えて來た。

『それ、大手口の同勢に後れをとるな』

四郎は聲を忍ばせながら、路のかなたに、星明りで黒く浮き上つてゐる一條の橋を、槍の穂先で指示した。

こゝでも城内は、表口の場合と同じやうに、ひっそり閑と靜まりかへつてゐた。

険しい山路を踏み越えて來ただけに、不意に敵を襲うといふ野獸

のやうな興奮が、敵の何の用意もなさうな沈黙によつて、一層一同の心を勇躍させた。

四郎を眞先に、この一隊は、われおくれじと、裏門口の前に架つてゐる橋の中程まで進んで來た。

この時、後の山手の方で、突然、ズドン……と、一發、時ならぬ鐵砲の音が、山に反響して鳴響いた。

四郎を始め一同の者は、はつとして、思はず歩みを止めた。その途端――。

彼等の立つてゐる橋が、不意に、メリ／＼と物凄しい音を立て、中程から眞二つに折れてしまつた。

『わつア……』

橋の上では、一瞬、悲鳴と云ふよりも、地鳴のやうな何とも云へぬ凄惨な叫聲が起つた。

が、それもほんの一瞬、橋上の人馬は、折れた橋材と一緒に、その恐しい悲鳴を聞の中に残して、そのまゝ幾丈とも知れぬ眞暗い谷底へ崩れ落ちて行つた。

血 槍 踊 り

鳥谷崎の城内に、勝戦の酒宴が開かれたのは、その日のお晝時であつた。

明け放した大廣間の縁先には、頼母を初めに、土方のものと

も、縁先に續いて廣庭には、中間、小者、賦役の百姓たち、圓座を作つて、飲めよ、歌への大賑い――

その圓座の中程へ、づか／＼と進んだ一人の男があつた。兩鬢高く刺り上げて、もの／＼しい鐵髭、小具足に陣太刀を長く横へたその風體は、云ふ迄もなく奴である。

と、その奴、ふら／＼と足どりも可笑しく、手に掲げた血槍を宙に振ると見えたが、やがて銅羅のやうな聲をはり上げて、

「ちーごーぶのてべつから

星のおやちがつばぬけて

火事のたまごを

ぐはぢやりぶんぐはした」

と、ふし面白く歌ひつゞけながら、血槍を打振り、引かつぎ、足拍子をとつて、踊りつゞけた。

どつと湧きかへるやうな歡聲が四方から上つた。

やがて見てゐた男たちも、我も我もとそれに加はつて、その男の音頭につれて、歌ひつゞけ、踊りつゞけるのであつた。

丁度、その頃、城中の奥深い佛間に明々と燈明を燈して、松齋と二人の孫娘が靜かに端座してゐた。

『喃、孫達、當城もこれで先づ安泰、が、これもひとへに神佛の御加護があればこそぢや、何しろ目も見えぬこの祖父の槍先にかゝる者があらう、が、それを思ふと僕は、つく／＼身の冥加の程が、恐

しいのぢや、武門の習ひとは云ひながら、十八の初陣以來、
數限りもなく人の命を槍先にかけたこの松齋、例へ無間地
獄に落ちやうとも、毛頭、恨み申す所存はないが、其方た
ちの事を思ふと、たゞひとすじにみ佛におすがり申したい
のぢや、わけて今度は本家への申譯けも立つた。この、上は
本家へ城を返へし、弓矢を捨て、佛門に入り、手にかけて
者どもの冥福を祈る所存ぢや、』

語り終ると、松齋は、その盲いた目を燈明の光に向けな
がら、靜かに合掌した。

我昔所造諸惡業 皆由無始貪瞋痴 從身語意之所生 一

切我今 皆懺悔

朗らかな讀經の聲が、戰勝の祝酒に湧きかへつてゐる城
内の奥深いあたりを香華の煙とともに靜かに漂うてゐた。

註「ちーごーぶ」は地瘤の意、「てへつ」は天邊にして山頂
を云ふ「星のおやち」は星の爺の意にて月の隱語、「づば
ぬけ」は高く抜け出づの意、「火事のたまご」は提燈の隱
語にして、「ぐはぢやりぶんぐはした」はぐわんと踏み破
つた事を指す。全體の意は、日が山上に出たので提げ
て來た提燈を踏破つてしまつたと云ふ意なり。もとの
鳥谷崎今の花卷地方に傳はつてゐる槍踊の歌である。

學 部 佛敎學、宗敎學、哲學、史學、國文學、支

那文學、英文學科、

大 學 豫 科 第一學年級 第二學年級

專門部佛敎科 第一學年級 第二學年級

同高等師範科 第一學年級 國語漢文科、公民歴史科

日本精神講座開設

入 學 試 驗 各科トモ四月五日ヨリ

大正大學 學生募集

特 典 學部卒業者ハ文學士ト稱スルコトヲ得、中

等教員及ビ高等教員無試験檢定資格アリ、
高等師範科卒業生ハ國語、漢文、公民歴史、
豫科ハ英語ノ中等教員無試験檢定アリ

四月四日迄

願 書 受 付 學則參照 郵券封入申込マレタシ
細 在 東京市豊島區西巢鴨四丁目

所 詳 (市電省線バス共便利) 電話大塚(86)八九四、九九六

俳壇

大田 耳動子

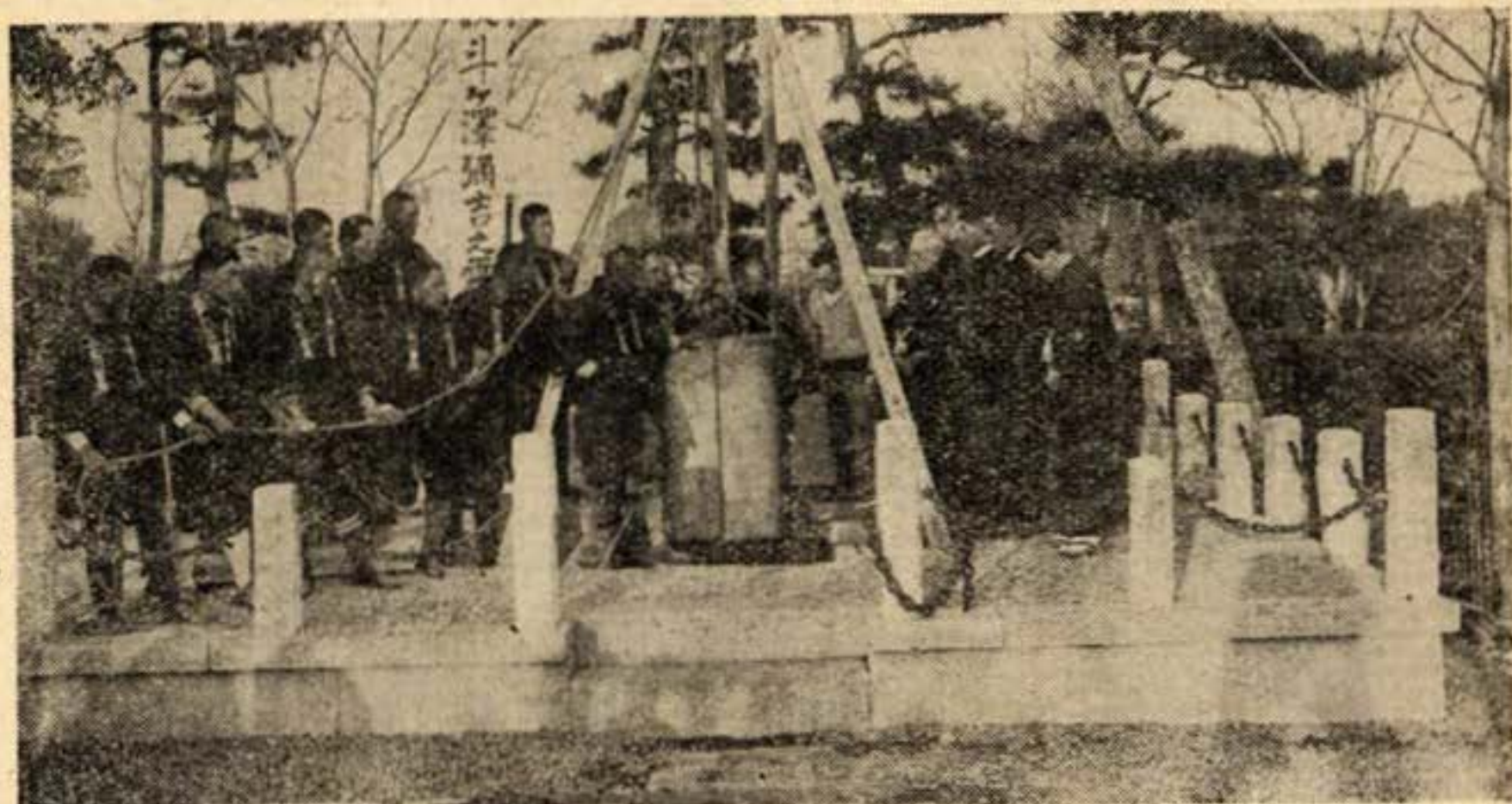


東京 平松 白奎
子の醜の手毬弾みてかすみけり
東京 伊原 青路
つながれし犬に揺られぬ花八つ手
東京 古市告天子
古毛糸ふつ／＼切れて編まんにも
兵庫 楠田 英子
夕やみに山茶花白くういてこし
東京 杉浦茶々子
押せば開く扉は重き暖爐かな
青森 工藤 汀醉
冬の鰻鮓を引いて歩みをり
宮城 豊歳 月巴
ストーブに上官の来て静まりし
東京 寶田 砂川
水低く低くながる枯野かな
宮城 佐藤 耕石
雲低う雪になるらし山の脈

東京 西羅 光雄
小波の中に木の實の浮びけり
弘前 矢川 テイ
冬ざるゝ野を走りゆく戦車かな
神奈川 松本 龍翠
連りて鉛運べる師走かな
青森 鴨澤 昇
冬の雨重きマントとなりけり
掃海隊 篠田 信治
初風呂に流しを取りて父老ゆる
岩手 古澤 五葉
屋根の石なほして蟹の多構
岩手 砥森 大象
北斗星鋭くなりぬ慈善鍋
東京 石塚 十雨
眼も笑めば黒子も笑めるマスク哉
茨城 江田 飄逸
寒椿緑濃き葉に朱を印す

東京 關 歌泉
井戸水の温たくなり寒に入る
伊豫 二宮 昇治
白壁の干柿に散る木の葉かな
紀伊 奥村 映水
芋畑をあらすは猪の親子かな
山口 長岡 白朝
漂へる木の葉落葉に引かれたる
京都 平井 敬哲
弾み吹く風の牙ゆるや月の夜半
長崎 宮川 雨梯
寒月や己が影追ひガード下
上諏訪 久保田 穰
湯の瀧をうつて病葉散りにけり
香川 角田 貞子
緊がれて仔犬鳴きをり靱干せる
青森 七戸 木賊
寒鳥枝ゆるがして飛びにけり
宮城 星川 月堂
温泉の町さびれけり年の暮
宮城 千葉稻村子
寒椿ほこりまみれに活けられて
大阪 寛 弘道
散る木の葉疊にうつる朝日かな

新宮 奥村 映水
岩壁に這ひ伸びてあり蔦紅葉
奈良 下辻 俊雄
寒行や寒さの中に温さあり
大阪 前中 杜歩
寒風にホース凍れる火事場かな
神奈川 藤崎 義和
鶏の遠音に雪の深さかな
東京 大野 星寶
霜柱踏みしだく旭は耀やかに
下關 關野 公孫
刈田行くや廣告燈の早や灯る
京都 松尾 慈海
朝霜に聞く人はきく木魚かな
北海道 竹岡 昇全
寺めぐる細き木立や寒の月
三重 岩田 諦眞
したしさは二軒並びて雪の家
西ノ宮 林 成昭
隨邊に蚊のゐたりけり冬の暮
滋賀 佐藤 惠二
義士祭や火葬場へ行く試膽會
備後 金子 誠心
一穗の燈火分つ夜業かな



(寫眞は埋棺當時のもの)

科學
と
信仰

自分の遺骸で 本堂を建立

光明寺法主

窪川旭丈

私もいろんな人と交際して、立派な臨終や珍らしい遺言状等には、随分と多く接したが、斗ヶ澤彌吉氏の遺言状ぐらい感涙に咽ばしめられたものはない。全く廣い世の中にもまたとない珍らしい而も有難い遺言状である。

斗ヶ澤彌吉氏は軍醫出身の醫者で、大正十年から現在の東京市江戸川区東小松川町に堂々たる病院を經營してゐたが、二十年來の苦心の結果、カルボールとフォルマリンの合劑を死體に注入すると、死體が永久に腐敗しな

いと云ふ學説をたてた。そうして、自分の死體でこの學説を證明しようと思つて、養嗣子の徳太郎氏に常日頃から『私が死んだら、死體に例の合劑を注入し、先日作つておいた銅製の箱に入れて葬つてくれ』

と云ひ聞かせてゐた。それから更に自分で近所の下鎌田町の安養寺と云ふ淨土宗の寺を菩提寺に定め、墓地も境内の入口に設定して、地下を一丈五尺に掘り下げ、間口八尺、奥行九尺の壯大なコンクリート固めの地下室を作

り、生前からその準備をととのへてゐた。

ところが、昭和六年三月十三日に、急性肺炎で五十三歳を一期として卒然と逝去した。

自分の學說の眞偽を證明する爲に、自己の身體を實驗臺となす事は、醫學に熱心な醫者には往々ある事で、敢て珍らしい事ではないが、「俺が死んだら、すぐに遺言狀を見ろ」と云つてゐた生前の言葉通りに、死後、直ちに開かれた遺言狀を見る及んで、氏のこの死體處置が全く獨特無比で、然も烈々たる信仰心によるものである事が判つた。

遺言狀には、勿論、遺族の生活に就て、微に入り細を穿つた事も書れてゐたが、まつさきに書いてあつたのは、例の死體處置の事であつた。そして更に屍體の検査は百年後にする事として、死後直ちに百ヶ年の期限で千圓の現金信託をする事を命じ、しかも百年後の千圓(死後直ちに遺言通り徳太郎氏は千圓を三井信託に現金信託としたが、その契約によると、年七分の複利で、百年後には四十七萬圓となる)の處分法は整然と次の如くに遺言

されてゐた。

一、全額の百分の六〇は菩提寺建造費

一、全額の百分の廿五は更に百年間信託

し、その利子を寺の維持費にあてること

一、全額の百分の二は更に百年間信託預金

として据置にし、寺の再築費にあてること

と

一、全額の百分の二は檀家全部の廻向料とする

ること

一、全額の百分の一〇は公共團體の寄附金とする

こと

一、全額の百分の一は醫學の泰斗を招いて屍體を掘り出し、研究の上、再び元形

のまゝ保存しておく費用とすること

以上

百年後の四十七萬圓の大金の處分法に以上のやうに、菩提寺中心に定められてゐた。しかも斗ヶ澤家では受取人を安養寺と書き、一通の信託證書は三分されて、一つは墓地の中の小さい銅製の箱に、一つは斗ヶ澤家に、一つは安養寺に夫々保存された。

誠に珍らしい遺言狀であるが、彌吉氏の自

己の學說に對する眞剣さもあることながら、

それにもまして菩提寺を建造して、自分の祖

先のみではなく廣く未知の人々の祖先の靈を

も慰めると云ふ有難い心情が透つてゐるの

には、何人も感歎の眼をみはるであらう。勿

論、この熱烈な祖先崇拜の奥底には佛に對す

る深い信仰が光つてゐる事を見逃してはなら

ない。佛への歸依なくしては、こんな廣大な

發願は生じて來ない。

私は彌吉氏の葬式の際に、當時の増上寺法

主道重大僧正の代理として、光榮にも導師を

つとめさして頂いたが、この墓の下に彌吉氏

の死體がそのまゝアルコール漬けになつて、

木製と銅製の二重の箱に收められてゐるのだ

と思ふと、まだ生きてゐられはしないかと、

自然に法悦の涙がにじんで來た。其後、彌吉

氏の未亡人壽子さん、養嗣子徳太郎氏を始

め、斗ヶ澤一家の方々と別懇な交際を續ける

やうになつたが、壽子さんは稀に見る熱心な

信仰家で、今日に至る迄、共に念佛を喜びつ

つ、道の友として交際させて頂いてゐる。

壽子さんから聞いた生前の彌吉氏は、殊更に佛道に精進すると云ふ程ではなかつたが、祖先を大切にすることは言語に絶してゐた。また、氏の日常のモットーは「自分によくして

もらうには、人によくしなければならぬ」と

と云ふ事であつたが、これこそ佛教の菩薩行であつて、それを身を以て行つた處に、彌吉氏の尊い信仰生活があつたのである。單に高尚な佛教の教理を論じたり、別時念佛を修したりする事のみが佛道ではない。それ等も有難い事には違ひないが、それが日常生活の中に植えつけられねば價值はない。確固たる信念を獲得し、それを實踐に移してこそ、眞の佛道である。(寫眞は故斗ヶ澤氏)

かく考へるとき、彌吉氏の行爲は眞に模範

ともなる

べき佛道

の實踐で

あつた。

菩薩道を



堂々邁歩した佛弟子の歩みであつた。彌吉氏のこの徳望を慕つて、今日も尚、命日には大勢の人が集つて、餘徳を偲んでゐるのも、氏の信念が如何に強固であつたかを、雄辯に物語つてゐるものであらう。

併し、彌吉氏のこの行爲の蔭には、夫人壽子さんが與つて力あつた。壽子さんは信仰的な家庭に育つたので、既に幼少から宗教的訓練を受けたが、十三歳の時に母を失ひ、義理ある母を迎へながら、風波もたてず立派な生活をつけたが、更に斗ヶ澤家に彌吉氏の後妻として嫁いで來てからも、彌吉氏を助け義理ある一人娘を心から可愛がつて育てた。だが、現在のやうな燃える如き信仰を得たのは、彌吉氏の歿後の事である。

彌吉氏が逝去された時、壽子さんは生憎大病で、思ふやうに看護も出來なかつた。臨終にもよく面倒も見られず、後髪を引かるゝ思で死別した。長い間いろ／＼世話になりながら、看病もしなかつたのは、誠にすまないと思へてのつぐなひにもと、百ヶ日のすむ迄は



【佛】
【の】

【く】
【に】

自力更生

上中 甲 堂

自力更生といふことを文字通りに解釋して他人にたよらずに凡て自分の力で生きて行くことなりと云うてゐる方もあるやうであります。が、よく考へて見ますと、世の中に誰一人として自分の力ばかりで生きてゐる人もなければ、又生きようとしても到底出來るものでもありません、生きる爲には總て他方面の支持を受けなければなりません、假りに私が立派な主人であるにしても家内の支持がなければ毎日の勤務を生帳面にするには出來ません、又店に參つて立派に仕事をやり通すにも

何處にも出ず、とちこもつて喪に服しようと思ひ、決心して、佛への回向生活を續け始めた。丁度この時に、知人の木本さんから兩國の回向院で岩井僧正の五重相傳があるから、是非お入りなさいとすゝめられたが、百ヶ日間は何處にも出ないと決心してゐたので斷つた。併し、木本さんが、「一日だけでもいいから、こんな時こそ佛法の有難さを味はゝねば駄目ですよ」と熱心にすゝめられるので、それでは一日だけの積りで参拜した。ところが、岩井僧正の懇切極まりない有難い説教だから、壽子さんはすつかり感激した。

一日の豫定がとう／＼最終日までになり、信心は頓に固まつた。それから、續いて昭和六年十月には増上寺で熊野上人の勤誠で五重を受け、道重大僧正の傳法を頂き、一段と信仰に磨きがかゝつた。昭和八年には道重大僧正の書を頂いて墓地を飾つた。特に道重大僧正には心から歸順して、大僧正の遷化迄、感激せずにはおられないやうな、親身な世話をした。

然るに一昨年の十二月六日に、柱とも頼んだ養嗣子の徳太郎氏が、四十二歳の若さで、九人の子女を残して卒去した。

義理ある娘、九人の孫、義理ある實家の母、それに不幸にして結婚に破れた實妹の大家族を統率して、萬端の指圖をせねばならなくなつた。病院は他人に譲つて、江戸川區の今井町に移つたが、殆んど他人と同じやうな人々の大世帯を一身に背負つて一意信仰の力で風波一つたゞせず、平和な生活を續けてゐる。

どんな事があつても怒らない、これが壽子さんのモットーである。そして、信仰を得てから今日迄、ほんとに一度だつて人に怒つた顔を見せた事がない。なんでもない事のやうであるが、餘程しつかりした信念がなければ實行出来ない事である。念佛生活によつて樹立された尊い記録である。

誠に夫婦揃つて信仰に生き、それを實踐に移した有難い人として、讀者に紹介して、信念培養の資に供する次第である。

主人始め同僚の支持がなければなりません、又店としては其仕事を進めて行くに顧客の支持を受けなければなりません、いくら金持であらうとも、いくら力のある人であらうとも凡て人様の支持を受けなければ何一つも成すことは出来ませぬ、斯様に吾等は皆、人様の支持によつて生きてゐるのであります、縁起の實相とはこのことを謂ふのであります。

そこで私はこの縁起の實相に目覺めたことを自力更生したと云ひたいのであります。即ち吾々が世間一般から受けてゐる御恩に眞實感じた時に自分の力は、麤つて來るのであります。自分の儲ける金で一家が食つて行かれるからと云つて自分は人様の御恩になつてゐないと云ふ譯には参りません。例へば五錢の白銅一個で電車に乗つて自分の金で電車が動くのであると大きな顔をしてはなりません。世間の皆様に乗つて下さるからであります。私等は凡ていつでもどこでも周圍の人々の御恩を受けなければ一刻も立行かぬのです。古歌に『己が目の力で見ると思ふなよ』



童話

老僧と雪佛

赤木 健
野水晶子 畫

欄間の彫物を見て暮してゐるばかりで
した。

たまに、暖かい日などには、日當りのよい縁側に出て、日なたぼつこをすることもありました。また人に手を引かれながら、本堂へ出かけて佛さまを拜むこともありましたが、いつでも蚊のなくやうな聲で、

『南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛……』

と、二三度くり返して唱へるだけで、誰も本當のお經をあげられるのを聞いたことがありません。

あまり年をとつてゐたので、ことに

ある山の上の大きなお寺に、一人の老僧が住んでゐました。この老僧は、たいそう學問が出来る上に、お説教の上手なお坊さんでしたから、昔からお坊さんにならうと思ふ人達は、みんなこの山に登つて来て、老僧からいろいろな學問を教はりました。

けれども、老僧はもうすつかり年をとつてしまつて、今では學問を教へたりお説教をしたりすることも出来ません。床についたなり毎日唐紙の繪や、



よるとほかのお経は忘れてしまはれた
のかも知れませんが。ある時などは、そ
れも暖かさうな春の日が、木の間をも
れて照つてゐる日でしたが、老僧は本
尊さまの前で、

こんこん雪ふれ、雪ふれや
野道にまします地藏尊

奈良の大和の御佛に

おとらぬ佛となるまでに

こんこん雪ふれ、雪ふれや。

こんなことを唱へてをられたことが
ありました。一人の小坊主が不審に思
つて、

『和尚さま、只今のお経は何のお経で
ございますか』

と尋ねると、

『只今のお経つて、どんなお経ぢや？』

小坊主は、面喰つて、

『只今和尚さまが本尊さまの前で、お
唱へなされたお経でございます。あれ

は何のお経でございますか』

すると、老僧は小首をかしげて、

『わしは今、どんなお経を上げたか
な？』

『今までに教へていただいたことのな
い面白いお経でございます。……こ
んこん雪ふれ、雪ふれや。野道にまし
ます地藏尊……といふのでございまし
た』

その時、眉毛の白い老僧の顔が、
いかにも無邪氣になつて、

『なアに、あれはお経ではないのぢや。
ははゝゝゝ』

二

こんな風にして、老僧はまことに静
かな日を送つてをられました。ある
朝のこと、いつもならとつくに眼をさ
まして、南無阿彌陀佛を唱へてをられ
るはずの老僧が、今朝にかぎつてお眼

さめにならないのを不審に思つて、
『和尚さま、和尚さま——』

と、靜かな聲でお弟子の一人がよんで見ましたが眼を開きません。變んだなと思つて、今度は少し大きな聲でよんで見たが、やつぱり無駄でした。

そこで、お弟子は驚いて、ほかの大きなお弟子たちをよんで来て、いろいろして見ましたが、和尚さまはやつぱり眼をつぶつたままでした。

『息はあるだらうか』

一人の年とつたお弟子が、さういひながら自分の頬を老僧の鼻にあてゝ見ましたが、息はあるやうでもあり、絶えてゐるやうでもあります。身體をさはつて見ると、胸のあたりには少し温か味が残つてゐるやうだが、手足は大分つめたくなつてゐます。

弟子たちは、大變驚いて、藥を飲ませるやら佛さまにお祈りをするやら、

なにしろ廣い世の中に、こんな偉い和尚さまはないとまで尊んでゐる和尚さまのことですから、弟子たちは、まるで夢中になつて介抱いたしました。けれども、和尚さまの眼は開きません。その日も暮れて、その夜が明け、またその次の日が暮れても、まだ和尚さまは眠つたままです。

『もうこの上は、ただ御佛のお力を借りるよりほかにいたし方はない』

皆の考へは、それに一致して、弟子たちは寺中の佛さまに、手分けをして祈りはじめました。本堂はいふまでもなく、庫裡や塔や、庭先の佛さまから中には山の途中まで下つて道ばたにある佛さまに祈るものもありました。

ところが、それは丁度冬のことです。その晩は空も曇つて大そう寒いと思つてゐる中に、まつ暗な空から、さらさらと白いものが降りはじめました。

夜がふけると、雪はますます盛んに降つて来て弟子たちの頭にも襟にも降りかかり、積つた雪は、いつしか膝まで埋めるほどになりましたが、弟子たちは、そんなことには全く氣もつかないやうに、めいめい佛さまの前に坐つて、珠數をもみながら聲もかされるばかりに祈りつづけたのでした。

夜が明けて見ると、空はからりと晴れてゐます。弟子たちははじめて夢からさめたやうに、澤山つもつた雪に驚きながら本堂の方に歸つて來ました。

さうして、おそる／＼和尚さまのお部屋をのぞいて見ると、いつもの聲で、
『南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛……』

と唱へてゐるのが聞えるではありませんか。弟子たちの驚きと、喜びとは一通りではありません。

『和尚さま。お眼ざめになりま
したか?』

『和尚さま。お氣づきになりま
したか?』

昨日の夕方眠つて、今朝あた
りまへに眼をさましたのだと思
つてゐるらしい老僧は、かへつ
てびつくりして、あわてた弟子
たちをとがめるやうに、聞き返
しました。

『何ぢや。お前たちは、何をそ
んなにあはてゝゐるのぢや?』

『でも和尚さま——』と弟子
たちは、一昨日からの様子を話
した上で、

『その間、いつたい和尚さまは、
どうしておいでなさいました
か?』

すると、老僧は、その時はじ
めて思ひ出したやうに、



『うむ、わしは、大分久しく眠つ
てゐたやうぢやな』

さうして、次のやうな物語りを
なさいをした。

——うつら、うつらとしてゐる
中に、わしは、今までに見たこと
もないやうな立派な御殿の門前に
立つてゐるのぢや。すると、する
すると扉が開いて、一人の役人が
わしを門内へ案内する。わしは天
子さまの御所ではないかと思つ
て、恐る／＼正面に進むと、一段
高いところに閻魔大王がいらつし
やる。赤鬼青鬼がその傍に控へて
ゐる。さては、わしは地獄とやら
に落とされたのか。この年まで御
佛の道を學んだ甲斐もなく、地獄
に落ちるとは情けないことぢやと
思つてゐると、

『何者ぢや?』

と、大きな聲が聞えたので、
『明阿と申す瘦法師でござります』と
お答へ申して、口の中で、南無阿彌陀
佛を唱へてゐると、そこへ一體の地藏
尊が現はれて、

『わしを刻んだのはこの法師でござい
ます。どうぞ極樂へお廻し下さるやう
に』

さういつて、閻魔大王にお願いして
下さるのぢや。有難いことながら、こ
の地藏尊は、どこでも拜んだこともな
い地藏尊ぢやと思つてゐると、またも
大きな聲で、
『感心な法師ぢや。極樂へ廻してとら
せる』

やれ嬉しやと思つたが、それについ
て思ひ出されるのは、母上の身の上ぢ
や。俺一人上つても、母上が地獄に落
ちてゐたのでは、こんな悲しいことは
ない——と思つたゆゑ、

『子供のころに別れまし
た一人の母、この母がた
ゞ今どうしておいでか、
一眼あひたいのが
お願いでござりま
する』

と、
申しあげると、
赤鬼の後の扉が
すつと開いて、
火の中で苦しん
でをられる母の
姿が見えたのぢ
や。俺は息も止
まるほど驚いて、
『母をお救ひ下さ
りませ。俺はいか
なる苦しみも厭ひ
ませぬゆゑ、俺の
代りに母を極樂へ



お廻し下さりませ』

と、手を合せ、額をついてお願い申しあげたところが、閻魔大王の御返事はかうぢや。

『ならぬ！たとへ母であらうとも、人の身代りは許すことならぬ。母を救はうと思ふなら、再び山の寺へかへり、一日に千體の佛を刻むがよい。然らば母をも救つてやらうぞ！』

俺は、それを聞いてがっかりして御門を出た。しばらく戻つてくると、暗い空の上に、さつきの地藏尊のお姿があらはれ、ふと消えては、またあらはれる。その様子がいかにも大きな綿雪でも降るやうぢや。それで思ひ出したことがある。俺は子供の自分雪投げや、竹馬にのつて遊ぶ仲間にははいらないで、雪さへ降ると、地藏尊をこしらへて遊ぶのが好きぢやつた。それか、こんこん雪ふれ、雪ふれや

野道にまします地

蔵尊

奈良の大和の御佛

に

おとらぬ佛となる

までに

こんこん雪ふれ、

雪ふれや。

といふのは何のお経かと、この間お前たちが訊ねたのもその時分の唄なぢや。そんなものを本尊さまの前で唱へるとは、俺もすつかりまうろくしたと見えるな、はゝゝゝゝ、——

かういつて、さも愉快さうに笑つた老僧は、弟子たちを見て訊ねました。

『今日は雪が降つてゐるぢやらうな？』

『降つてをりますとも、腰までも埋まるほどの大雪でございます』

『それでは』と、老僧は體も輕さうに立ち上つて、



『まことに氣の毒ぢやが、この雪をもつて今日中に千體の佛様を作つてはくれぬか。俺の一生の頼みぢや。どうか千體の佛を作つて下され』

弟子たちは、一人としていやな顔をするものもありません。それどころか、皆な喜び勇んで、ときの聲をあげて庭に驅け下り、わき目もふらずに雪をまるめたので、千體の佛さまはたちまちの中に出来上り、庭から山から一面に佛像で埋まつてしまひました、その眺めは、とても立派なものであつたさうです。(をはり)

鑽仰運動ニユース

三上人遠忌に

舉宗的編輯で

威風を示さん！

特輯號發行

勢觀房源智、二祖鎮西、三祖記主と法然門下の遠足三上人の御高德を偲びて、今春三月を期して我宗はその遠忌の準備に知恩院を中心に一宗を擧げて大童であるが、我が「淨土」もこの好機に三上人の全貌を全國民に理解させたいと、既に去年より秘策を練つてゐたが、殆どプランも確定し、堂々たる編輯で二月初旬には「三上人特輯號」と銘うつて江湖に見えんとしてゐる。知恩院でも極力贊助を捧げられて、編輯から執筆に至る迄、種々奔走

せられ、且つ團參の全信者に「淨土」を贈呈せられる事となり、數萬部の購入を申込んで來られた。名實共に本誌が宗門の教化前線を確保した快ニュースである。最高の教化雜誌たる「淨土」も愈々吉水門流には不可缺の存在となつたが、讀者諸君も、どうかこの三上人遠忌の好機を逃さず、「淨土」を以て教田を開拓し、未信の大衆に法然の清流を掬せしめられん事を願ふ次第である。三月號の「特輯號」は刮目して待たれよ。

教田を開拓しゆく淨土

本誌を武器として

布教の第一線に！

朝鮮北端の新義州に孤立無援で淨土宗教會所を設立し、孜々として布教に専念してゐる小出立仙氏は、自己の努力を有意義に實らせる爲には「淨土」の力をからねばと深く感ずる所あつて、今般、私財を投じて、一三〇名の未信の人

新らしき求道者が必ず參集する。本誌による布教線の充實、これこそ明日の教界を築く唯一の原動力である。

「淨土」で

新教田確保

北海道の僻遠の地、下芭露に獨力で最近布教所を開いた中村定善と云ふ若い僧がある。熱烈燒き盡さざる護法の念を以て、幾多の辛苦と戦ひながら荒蕪の教田を開拓してゐるが、本誌の豊富な教化力に注意して、今般新年號四部を自費で購ひ、町の有力者に贈呈して、會員獲得に努力中である。これまた新教田開拓者が如何に本誌を重視してゐるかの生きた證據である。布教線を打開するものは現在の處、「淨土」唯だ一つである。

元旦の虚空にこだまする

若人の念佛の聲

— 山口の瑞相寺支部 —

山口縣柳井町瑞相寺では本會設立と同時に多數の會員を獲得し祖徳鑽仰の運動に精進しつゝけてゐたが、こゝに第三年の春を迎ふるに當つて一大飛躍を示しつゝあることは注目し價するものがある。

元來、同支部は放光婦人會の東條はな氏の献身的な努力によつてその結成を見たものである。然るに近來諸種の類似宗教による被害も現はれ一般識者の警戒を拂ふところとなつてゐたが、折しも同町商工會長佐村清一氏の卒先の盡力によつて實務に従事する青年男女の修養會が發起され、こゝに俄然『法然主義』が顯揚されることゝなつた。かくて例會は毎月一日と十五日に行はれることになつたが、その第一回の舉

行が去る一月一日に舉行され、元旦早々からしかもうら若い青年男女によつて聲高らかに念佛されたといふことも心嬉しいニュースだ。當日は本會から井原文雄

鹿兒島支部であつた話。

縣會議員の松田君が銀行の金網の中に飛込んで一舉に三十七名を獲得した創刊當時からの誌友の中に頭取の海江田さんと云ふのがあ

鑽仰美談

るこれはとてもいい雑誌だと云ふので、自分の讀んだあと、銀行の小使さんに「これは是非讀みなさい」と手渡した。翌月新しい「淨土」を渡しながら「どの話が一番いい」と思つたかネ」と聞いてみた。小使さんはどう答へたものかと、當惑して頭を掻き

氏が出講して、『菩薩行』と題する熱舌をふるひ、會衆に深い感銘を與へた。

蓮光寺支部

蓮光寺支部(東京本郷駒込)の本年最初の例會は去る九日、舉行せられた。當日は特に東京布教團の重鎮小林定禪氏が隨喜來演せられて、法雨に浴せしめられた。

がら引退つた。處が、頭取さんの質問は熱心に毎月續く。小使さんは愈々困つて、とうとう金網の中で二年目の誌代を集めてゐる松田君を捕へて「もうこの雑誌だけは

送らないやうにして下さい。毎月頭取さんに試験せ

れるんで閉口です」と哀願した。さすがの松田君も頭取さんの熱心さにつくづく感心してしまつた。松田君は縣會が始まつたら議員の中から二十名は會員にすると意氣まいてゐる。(小橋投)

會員の聲

▲楽しく「淨土」の到着するのを待つて居ます。當地は御承知の通り長崎港口に位し、カトリック教の教化はものすくなく、佛教徒を壯に誘惑します。祖先傳來の佛の血を受けた私共は、只だ一心に念佛を唱へ、「淨土」を通して家族一同と共に朝夕の禮拜を怠りません。(長崎市・山内伴助)

▲私は眞宗大谷派の布教師ですが、貴會の「淨土」は良き指導者となり、且つ又自己の良き修養師であります。(石川縣・木下智導)

▲責任ある記事を以て世の人が「淨土」をすきになり、從來の誤謬を取捨てるやうにして戴きたいものです。眞實を云ふと只習風慣俗を以て佛教に、或は名聞の爲、廣告的に是に據つてゐるに過ぎないのが現在の佛教信者の大半です。(鳥取縣・小林知道)

▲謹しんで新春のおよろこび申し上げます。或る御僧のみ教の下に御會のみ榮へを蔭ながら御祈り申して居る者でござります。そしてつきなき自分、弱き女心、本年こそ新しい門出に當つて、唯心的に人として、人らしい、女らしい心の糧を頂き、信念に生きたいと存じます。つきましては「淨土」を毎月御送り下さいませ。會費も直ちに一ヶ年分送りさせて頂き、皆様に御おすゝめさせて頂きます。(和歌山縣・柿本文子)

▲「淨土」は愈々本格的隨自法門を開闡すると共に、讀者基本の經濟を樹立して、階級上の超越に盡し、この地上に淨土を實現すべく躍進すべきである。(東京・樹下生)

布教用書は「淨土」を以つて最とす!

淨土の土臺は
人間

聖典
講義

見失はれた金剛石

「小消息」講義（その二）

中村 辨康

理想と感情と願望との一致

十方に淨土おほけれども、西方をねがふは、十惡五逆の衆生もむさるる故なり。諸佛の中に彌陀に歸したてまつるは、三念五念にいたるまで、みづから來りてむかへ給ふがゆへ也。諸行の中に念佛をもちゆるは、かのほとけの本願なるがゆへ也（和語燈錄）【法語抄四七】

十方の淨土から

「淨土」に就て維摩經の佛國品に突拍子もない事を言つて居ます。即ち「救はるべき人々こそが菩薩の淨土である」と。

界 各人各様の世

理想の異りに 依て淨土も異 る

そして「譬へば空中に家を建てる事は、空想なら何でも無いが、實際には出来るものでないと同様に、元と元と人類を幸福にしやうとの意圖から淨土が建設さるべきであり、其目的たる衆生と云ふ土臺なくては淨土もあり得ない」と云ふのです。

して見れば人類あつての淨土であり、人々の機類に應同した淨土があつてよい筈だから、實は無数の淨土が想像されてもよい譯であります。

されば「十方に淨土あり」との經説も納得が出来ますし、それ等の建設者たる諸佛のましますことも信ぜられます。

私達凡人の世界にしたつて、實際には無数の世界があります。教育者の世界、巡査の世界、工業家の世界、商人の世界、醫者の世界、辯護士の世界、官吏の世界、男の世界、女の世界、大人の世界、子供の世界、等々、夫れ夫れの生活に依て住む世界が違つて居ます。随つて自分の居住地、例へば東京としますと其人其人の生活様式に依て認識される東京は、夫れ夫れ異なつて居る筈です。呉服屋の東京、飲食店の東京、學校の先生の東京、學生の東京、女給の東京、はては泥棒の東京、乞食の東京など、全然性質の違つた東京が無数にあります。それを唯だ漫然と同じ東京だと思つて居るだけなのです。それは五官の作用だけが私達の認識の全部ではないのに、人間共通の五官の感覺——それも微細には違つて居るけれども——から来るものだけで、同一なりと考へて居るからです。

其上に、人々に依て、理想が違ひます。目的が違ひます。そして其目的への行爲が違ひます。名は均しく大臣參議であり博士であり大將であつても、其境地なり力量なりが夫れ夫れ違つて居ります。

だから「十方三世の諸佛」の境地である「淨土」も、夫れ夫れ異つた光りを發揮して居ると考へられな

い事はありません。

淨土の異表現

七寶の國

重々無盡

重なり合つ

て關係が

複雑して居

ること

縁起相復雜

して居る大

宇宙の現象

理智表現の淨

土

加持身一に

は報身とも

云つて大日

如來の活

動的方面を

云つたもの

自由の國

況して國家政治の基本である國民あつての内閣があり得るやうに、衆生あつての淨土だとすれど、デパートではないが、其人其人の力量に應じて「十方淨土」の中の何れかが望まれてよい譯です。こんな譯から觀無量壽經と云ふ御經を見ますと、摩訶陀國の頻婆沙羅王の夫人韋提希の爲に、釋尊が神通を以て色々な淨土を見せしめ、それを選ばしめ給ふた事が書いてありますが、誠に興味の深いもので御座います。

「十方無量の嚴顯なる諸佛の國土清淨にして皆な光明あり」と云つては居ますが、例としては四つしか擧げて居りません。即ち

一、七寶合成の淨土

二、純蓮華の如き淨土

三、自在天宮の如き淨土

四、玻璃鏡の如き淨土

此内第一の七寶合成の國は、土地とか樹林とか宮殿とかの外形的の「物質」に就てのみ云つたものですから、極く淺い物質欲の連中に見せる繪看板に過ぎません。さしづめ近頃流行の類似宗教などの云つて居る理想に相當して居ます。一般人の感覺的な理想世界です。彌陀の淨土の外形も之に似ては居ますが。

第二の純蓮華の國は、一に蓮華藏世界とも云つて毘盧舍那佛の淨土で、奈良の大佛様のお臺座の蓮華の花壇の一つ一つに一佛世界の圖が彫刻されそれが蓮華淨土だと云ふことでありますが、之で見ると梵網經の初めに書いてあるのを模したものですから、謂ゆる重々無盡復雜微妙の縁起相の淨い方面を表象したものの、大宇宙の構成理論を清らかな蓮華にかたどつたもので、謂はば哲學的な世界とも云へませう。但し密教で三華藏世界を説く内、加持身の蓮華藏界を阿彌陀佛の淨土なりと云つても居ます。

明徹な世界

灌頂——國王

即位の時に
行ふ印度の
儀式ですが
菩薩が佛
になる時、
それに似た
式を、自在
天で行ふと
云ふ説話が
あり、引い
て密教など
で阿闍利の
位を受け
る時、灌頂
の式を行ふ
と云ふこと
です。
満足の出来な
い十方淨土

第三の自在天宮は、大自在天即ち印度の傳説にある天地創造神の世界の事で、現に印度人崇拜の的となつて居る「シバ」神即ち摩醯首羅の居る所、非常に清らかな世界と見えて色々の經典の中に「清淨なること自在天宮の如し」とよく云はれて居ますが、大自在の名の示すやうに活動自在を意味しても居ます。菩薩が成佛しやうとする時、先づ此處に来て、淨土を變現し、自在の力を得、十方の諸佛から成佛の灌頂を施されると云ふ話です。まあ云はゞ意志的な世界とでも云へませう。

第四の玻璃鏡の世界、玻璃とは水晶のことださうで、紫と白と紅と碧との四色、または黃碧紫白の四色ありと云つて居ます。其玻璃鏡と云ふのは何う云ふ風なものかよく判りませんが、靈芝大師と云ふ人は「其明瑩を言ふ」のだと云つて居ます。上海の居士林に行きますと「鏡の間」と云ふ一室があり、中央には四方から拜むやうに舍利塔が置いてあつて、四壁は全部鏡が張りつめられて居ますが、誠にすがすがしくて清らかな部屋です。鏡に寫る舍利塔なり人なりの影が四方に互ひに映り合つて、何邊を向いてもズーツと向ふまで幾つも幾つも私と舍利塔とが、重なり合つて寫つて居るのですから、其影はとても數へ切れたものではありません。かすかの向ふに豆粒ぐらゐな私さへ見えます。何だかおとぎの國へでも行つたやうな全くの別天地です。これなどは玻璃鏡の世界の一表現と云へないこともありません。つまりは重々無盡緣起の理を具體的に示さうと試みたものに相違ありませんが、經説の「玻璃鏡の如き淨土」と云ふのは、こんなケチなものではなく、もつと大規模なものでせうから、とても私達の想像に及ばないものがあらうと存じます。其處には理論の世界も感情の世界も動作の世界も、渾然として一つとなつた複雑な彩と光とを織りなして居ることとせう。

かうならべて見ますと、言葉は簡單ですが、其内容は極めて複雑して居ります。然しかうした淨土の内容を釋尊は色々と澤山に示されたけれども、悲しみにとざされて居た韋提希にはちつとも満足が出来な

五逆——一、父

を殺し。二、

母を殺し。

三、聖者を

殺し。四、

佛身を疵付

け。五、和

合團體を亂

す。

解説の三方面

十惡——身三

(殺すこと。

盗むこと。

淫ること。)

口四(うそ、

おせじ、わ

るくち、二

枚舌)意三

むさぼり、

いかり、ぐ

ち)

大慈光の満つ

る淨土

佛法滅盡——末

法萬年の後

つたのでした。

無理もない事です。

それ等は皆な清く美しい淨土ではありませうが、冷たいです。理智が勝ち過ぎて居ます。温か味がありません。涙に濡れて居る人達に取つては及びもつかない空中樓閣です。

第一力と頼んですが付く可き慈悲が見えません。

で、結局韋提希と云ふ人は、西方の極樂淨土即ち阿彌陀佛の無量壽無量光の世界を選んだのでした。

そこで考へて見ますと、佛敎では解脱の方面を智情意に分けて

智——轉迷開悟

情——離苦得樂

意——廢惡進善

として居りますが、その何れから進んでも、あとの二つは遅いか早いかは別としてもおのづから附随して得られるものと存じます。もしこのことが許されるならば、理智から進むよりも、または意志的實行から進むよりも、先づ以て萬人の望む感情の調整される方が本筋ではないかと思ひます。

況して五逆十惡と云ふやうな大きな罪を犯して其悔恨に悩む者に取つては、感情の疵が餘りにも大きいから、理窟や善行爲丈で癒される筈がありません。だから、感情上の疵が治るやうに療養されるべきであります。

そこで、阿彌陀の淨土こそは、行の一念十念でもよい。罪は何んなに深くとも差支へない。佛法滅盡と云ふやうな極端に悪い時代でもよい。煩惱具足と云ふやうな、折角悔ひ改めても後から後から犯して行く本質的な惡人だつても差支へないと、一切を包容して餘すところのない「大慈光」に攝め取られ、その温

に佛法はな
くなつてし
まふと云ふ
説

諸佛の母體

本有常住
元と元と
常に嚴存
すること

諸佛の中の一 佛か

讃められる阿 彌陀

かい愛の懷に養つて呉れる唯一のところなので、私達に選ぶ自由が與へられてある限り、其西方の淨土を選ぶのは當然な事だと思ひます。何しろ衆生あつての淨土なのですからね。

諸佛の中から

その大慈光の淨土の主である阿彌陀佛は、諸佛統攝の佛か、或は諸佛の中の一佛かと云ふ問題は、非常にむづかしい事で、議論も多からうと存じます。

達磨大師が「唯だ楞伽四卷のみ以て心を印すべし」と云つて推賞して置かなかつたと傳へられる大乘入楞伽經に「十方の諸の刹土、衆生の菩薩の中に有ゆる法（身）報（身）佛も化身も及び變化もみな無量壽（阿彌陀）の極樂界中より出づ」と云つてあるところから見れば、彌陀は「諸佛の母體」として一切諸佛統攝の本佛と云へますから、法華經の久遠實成釋迦牟尼佛、華嚴經の毘盧舍那佛、大日經の摩訶毘盧舍那佛等の佛と同體異名で、大宇宙の本體の人格化であり、湛然不動、常寂光の靜かなる理體、本有常住の法身であつて、願佛としての慈悲の發動がハツキリ現はれて居ないやうです。

では諸佛の中の一佛かと云ふ事になりますが、それだと「諸佛は同等」なのですから、取り分けて阿彌陀佛が諸佛よりも勝れて居ると云ふ理窟は、何うやら我田引水に受け取られる事にならぬとも限りません。

然るに妙樂大師が一切經を通覽して「諸經讚する所、多く彌陀に在り」と云つて居るやうに、大乘諸經典の多くが口を揃へて阿彌陀佛を稱讚して居るのは、一體全體、何うした譯なのでせうか。釋尊が御自分の感情から、好きで度々引き合ひに出したものでせうか。また假りに大乘諸經典は釋尊滅後五六百年乃至七八百年頃、色々な人達に依て編纂されたとする近代研究を許すとすれば、何故揃ひも揃つてあつち

願佛としての
阿彌陀阿彌陀佛の二
面觀

でもこつちでも期せずして大勢の經典編纂者が、阿彌陀佛の事ばかり讃めなければならなかつたのでせうか。誠におかしな話だと思ひます。

或はかうも云つて居ます。

即ち「阿彌陀佛は願佛として諸佛に立ちまさつて居るから」と。

之は色々な人が云つて居る事で、決して間違ひではないと思ひますが、之だけではまだ何だか物足りないやうな氣が致します。と云ふのは前に云つた楞伽經などの「諸佛の母體」たる意味が出て居ないからです。

然しよく考へて見ますと、楞伽經の「諸佛の母體」たる阿彌陀佛は、單なる靜的な常寂光の本體的理想佛ではなくして、一切の佛を産み出す活動體の佛なのですから、意志力は本願態として宇宙全體に満ち充ちて居り、また之の力に依て一切の諸現象も生み出され動かされつゝあるので、本體佛とはもう少し意味が違つて居るやうです。

「念佛讀本」の「生」の中にも「天地間に阿彌陀の願が充滿し、しかもそれを一法藏菩薩の卓越せる洞見に依て、四十八の本願として表示された」

と申して置きましたやうに、法藏菩薩と云ふ一求道者の理想貫徹が、まだ表象されずに居た阿彌陀を體現したのですから、本有的活動力の阿彌陀佛が法藏菩薩の成佛と云ふ一事實を通して、十劫の昔に報身阿彌陀佛として具體化されたのであつて、元來諸佛統攝の彌陀と諸佛の中の一佛としての彌陀とは、父子合一の一體なのですから、阿彌陀佛の名の中には兩方の意味を兼有して居るのでした。

例へて云へば、時計なら時計の理はもととあつたのですけれども、時計が出来ない以前には、判つて居なかつたのです。それが時計が發明された時、時計其ものの上に、時計の理が合體して、本體的な原理

大慈想の佛を
慕ふて

徹頭徹尾の大
慈悲

としての時計と具體的な一時計とが一つに表現せられつゝあると云ふのと同じ理窟です。

此事は既に義山上人も云つて居られ、然も

「彌陀も實には久遠の佛なり、されども宗義には本門の意を用ひず唯だ十劫と習ふなり。十劫とさへ思へば衆生の機がやすんで好いぞ」

と云つて、諸佛の中の一佛と習へば誰れでも佛になれると安心が出来からとの思ひやりから、暫く本體の意味には觸れないのだと云つて居ます。

さればこそ法然上人も、唯だすらすらと、

「諸佛の中で取り分け阿彌陀佛に歸趣するのは、三念でも五念でも、念佛の多少を論ぜず、いざ臨終と云ふ苦しい時にも、親しく來り迎へ給ふその大慈悲を慕ひ奉るからである」

と、黒田の上人へ御消息せられた譯で、正しく端的に願佛としての阿彌陀佛を強調せられたのだらうと存じます。

而も此の來迎は他の御法語にも「他力の上の他力、二重の他力なり」と仰せられて、最も阿彌陀佛の大慈悲を示すものであります。

諸行の中から

かくの如く如何なる罪でも許すと云ふ純愛情の淨土の中に養はれ、平生の護念は勿論のこと、臨終の時には必ず出迎ひに行く時まで云はれる親切な約束にもほだされて居る私達としては、何でその生みの母親とも云ふべき阿彌陀佛の御名を呼ばずに居られませうか。然もそれは、行とは耻かしくて云はれさうにも

淨土往生の八ヶ條

ない程の些やかな行であつて、むしろ自然に信の發露として叫ばずには居られない念佛稱名なのを、ことさらに「正定業」として本願の中に規定し、其上一念でも十念でもと許される限りの最少限度を條件とされた絶対愛を何で合點せずに居られませうか。

かう考へて來ますと、阿彌陀佛は徹頭徹尾大慈悲でかためられて居ると云ふものです。

維摩經に依りますと、生淨土法として八ヶ條を擧げて居ます。即ち

一、衆生を饒益してしかも其報酬を望まず。

二、一切の衆生に代つて諸の苦惱を受け、しかも自分の所有せる一切を施す。

三、心を衆生と等しくして常に謙遜の態度で處ることがない。

四、一切の求道者に對すること佛に對する如く尊敬し、未だ聽いた事のない經を聞いても疑ひを起さな

い。

五、修道者の氣持に違背しない。

六、他人の供養を受けるのを嫉まず、自分の受ける利益は少くし、さうした經濟關係中に於て兎もすれ

ば起り勝な穢ない心を屈服させて起さしめない。

七、常に自分の過ちには深く反省するが、他人の自分に對していけなかつたことは決して訟へない。

八、恒に一心に善き行爲を行つて色々の功德を求め。

此の八法を完成すれば淨土に生ずる事が出來ると、維摩居士が衆香と云ふ人に物語つて居るのですが、かうした一例を見ましても、一般的には淨土と云ふ理想の世界を獲る爲には、非常な努力が必要なのです。

それを至極簡單な念佛で與へやうとするのですから、其處に非常な大きな緣力が加へられて居なくてはならない筈です。

大緣力として
の何物かは？

發見の大難事

しかも其大縁力は、有限な人爲的の力で出来る譯のものではありませんから、天然自然に約束せられつつある「何物」かではなくてはなりません。

此「何物」かの發見が實に大事だつたのでせう。

何しろ「五劫の思惟」と云ふ永い永い沈思黙考と「長載永劫の修行」と云ふ數へ盡くせない程の工夫實行とが、遂に「信」の上に法爾自然に起る「念彌陀」法を發見したのですから、事は簡單でも其苦心努力と云ふものは實に大變だつたでせうと思ひます。

其上に法藏菩薩御自身が彌陀に歸一して彌陀になつたので、その御自分の體驗上から、最も純粹な「彌陀への融合法」としての「念佛稱名」が案出せられたのは、決して人爲的な意味のものではなく、全く天地を貫く自然な力が内藏せられて居る譯で、強烈な大慈悲心の致すところ、實に驚歎せざるを得ないものがあるではありませんか。

天地に滿つる強増上縁力を内包する稱名佛。

誠に「本願」たるに相應はしい最易最念の行と云ふべきです。

之をまた數多い諸行の中から、選出た法然上人の卓見もすごいものです。

砂の中に混つて見失はれたダイヤ。砂によれて光りが見えなかつたダイヤ。

それを發見したのが法然上人だつたのです。

諸行の中から念佛を拾ひ出し、念佛の中から本願の念佛を拾ひ出し、其本願念佛の中から更に選擇本願念佛の單信口稱の念佛を拾ひ出した苦心は、誠に「日本淨土教の元祖」たるに耻ぢないものであると思ひます。(つゞく)

選出されたダイヤ

編輯後記

◇未だ松もとれぬ中から今年は何となく多難を思はせる年です。

非常時と云ふ言葉も大部使ひ慣らされて来たが、その非常時が大分實感を伴つて来たのは動かし難い事實です。あまり大平樂を並べてはゐられない云ふ差し迫つた氣持からどうも人間が落付かなくなり、あせり氣味になる一面があり／＼と見へます。一部の人が云ふやうな世紀末的、嬰退的な氣分は確かに否定出来ない。これは社會的な壓力にも依ることだが同時これに抵抗し得る個々人の弱さをも物語つてゐるものでせう。

◇非常時は確かに凡ゆる方面がら個々人に迫つて來てゐるが、然しそのために、焦躁的になり、落付かなくなると云ふのは、時勢

の波に押されるものであり、眞に非常時に處する道ではない。かう云ふ時にこそ腹と腰をすえて掛らなければならぬのではあるまいか

◇宗教もこの時運の渦中で種々に取沙汰されたけれども、正しい宗教こそ、この時運に處して自己の信念を眞向から主張し、非常時の處となつてゐる人々に、冷靜な批判力とその渦中に處し得るの確固たる腹と腰とを與へる、人類的の光明とならねばならぬ。理論と實行の前に信仰が來なければならぬ。

◇本誌も淨土教の眞髓を出来るだけ平易明瞭な形式で發表し、法然上人の高邁な御人格の宣揚につとめ來たつたのも、結果に於てかゝる意圖と合致するなら、幸いです。

◇然し平易な説明は信仰の手引

ではありますが、信仰は體驗によつてのみ得られるものをりますから、必ず信仰の實踐に努力せられ、正教宣揚のために盡されんことを希望します。

◇本誌には高楠順次郎先生に巻頭を飾らして頂いた。

◇窪川旭丈師の實話も科學者自身のもつ信仰の強さを明瞭に物語るものであつて、科學と信仰とが兩立しないと云ふ淺薄な意見に對しての強い反駁でありませう

◇三月號は三月六日より京都知恩院に於て嚴修される鎮西、記主・勢觀三上人の御遠忌が、全國七千の寺院を擧げて大々的にとりおこなはれますので、特にそのための特輯號を發行し、大増刷を取行致します。讀者諸賢の御聲援を御願ひ申します。

淨土 二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和三年一月二十日印刷納本
昭和三年二月一日發行
(定價金十錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人 赤尾 光雄
印刷所 大日本印刷株式會社
發行所 法然上人續仰會
東京市芝區芝公園明照會館内
振替 東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢
(送料五厘)

一ヶ年 金一圓
(送料不要)

右の一ヶ年金壹圓は法然上人續仰會の會費です。入會申込みと同時に一圓御納めになれば、「淨土」が一ヶ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

新刊

中里介山著

法然上人傳

三六版二五〇頁
九ポバラルビ付
美麗クロース装
定價 六十四錢
送料共

法然上人を知ること、これは日本人として最大の常識である！

著者の言葉から

法然上人傳の權威は何んと云つても「勅修御傳」である。「勅修御傳」即ち「法然上人行狀繪圖」は伏見天皇、後伏見天皇、後二條天皇の三帝が法然の遺徳を深く敬信なされてゐたが、その時分は異教の手あひが争ひ起つて妄りに法然の傳記を作るに至つたので、正統の深くこれを憂ひ、天子にも御心を惱ませられた結果、後伏見上皇の勅により叡山功德院の舜昌法師が近代杜撰の著作を捨て、信用すべき實録をとつて收め、(中略)十四年を経てこの行を了へたものである。(中略)それ等を要譯してこの雅文の典籍を比較的安易に讀ましむることは現代人に對する一つの親切であると思ひ、敢てこれを爲して本書を作つた僭越の罪を許されたい。

古文豪の通俗化！

發賣所

法然上人鑽仰會

芝區芝公園十五號地
振替東京八二一八七

◇ 隣人の友社 發行所 ◇

講話

浄土信仰の真髓は實にこの一文に盡く！

新刊

!! 來出

布教用書の
最高峰

一枚

起

請

文

日本信仰史上に燦然と輝く法然上人の『一枚起請文』。この一文の中に籠る信仰の精神を知らずして、信仰の何者たるかを語るは潜越である。この簡潔流麗なる語句の中に脈うつ深く豊かな宗教の真理が當代隨一の名講義によつて、解り易く讀者の心に滲込んで行く！

宗教講話に新生面を開いた名講義！

發行所

法然上人鑽仰會

振替……東京八二一八七

定料共價拾二錢

一度に十部以上
購入されるれば

一部當り 九錢 (送料不要)

本會は特に浄土信仰普及のため左の如き犠牲的奉仕をなす寺院の布教用、工場會社等の修養讀物として、最適！

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十二年一月廿日印刷納本 昭和十二年二月一日發行

浄土 第三卷 第二號

定價金十錢 (送料五厘)